
俺と許嫁

シラバス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と許嫁

【NNコード】

N2832N

【作者名】

シラバス

【あらすじ】

就職難の中で何とか内定を貰った俺、西城悠斗。知り合いに内定の報告をしていた際に祖母から許嫁の存在を唐突に教えられ、混乱するもせめて大学を卒業するまでという条件で許嫁である三塚由奈との奇妙な共同生活が始まった。いや、俺の家は別に金持ちとか先祖が偉かつたとか全然無いから。許嫁にも色々秘密があるらしいが……。

ぎこちなくも周りの人々を巻き込み距離を縮める一人のほのぼの恋愛・コメディ・シリアルが主体なストーリー。

始まりの内定（前書き）

読者だったのが執筆にまで手を出してしまいました。
これから精一杯頑張っていきたいと思いまして宜しくお願いします！

始まりの内定

俺は大学四年の就活生だった。

世の中はニュースでも何度も真剣に取り上げられる程の就職難だ。ここ数年で大学生の人は本当にご愁傷様としか言えない。態々このタイミングで就職難になるなんて想像もしてなかつたし、実際此処まで大変だとは思わなかつた。

とはいってもその一人だ。

本当に何社受けたか最早曖昧だし、何度も他県に行って辛い思いもした。理不尽な面接対応や厳しい筆記試験、やる気はあるのに認めて貰えない悔しさは就活中にもう十分体験した。

重ねて言おう。

俺は就活生だった。

「有難うございます！宜しくお願ひしますーー！」

そう、大学四年の七月。

そろそろ決まらないと厳しいというところで何とか俺、^{サイジョウ}西城^{セイジョウ}悠^ユ斗^{ウト}は東京のあるソフトウェア会社の内定を貰った。

地元の宮城に就職出来なかつたのは残念だが……。今、この瞬間も内定が貰えず頑張つて就職活動を続けている人達がいるんだ。贅沢は言えない。

といつても宮城で一人暮らしをしてまで工業系の大学に通つていた俺にとつては希望に沿つた進路先と言える。

今後について色々期待や不安があるが今は純粋に内定を貰つた事が嬉しい。

「眞にも一応報告するか」

一応色々相談に乗つて貰つたり心配も掛けたりしたので研究室の同級生や教授、サークルの仲間、交流のある先輩や親戚に次々メールで報告する。

送つた直後にお祝いの返事が次々に届いた。

『おめでとう～！』

『ちくしょりおおおおおおおお～。先を越された！～。』

『おめでとう～！』

『来年は東京か、俺を見つけられるかな？』

『よつしゃ～。飲みに行こう～！』

一部おかしいが次々と届くお祝いメールに熱い気持ちが湧き上がるがまだ報告をしていない人物に気付いた。

「やうだ、祖父ちゃんと祖母ちゃんは携帯もパソコンも無いから直接電話で報告しないと」

祖父母は富城県の北部に住んでいる。

両親や弟に妹も俺の住む仙台に住んでいるが、俺は一人暮らしといつものに憧れていたので大学進学と同時に一人暮らしをしている。

その時に同じ町にいるのに懃々別々に住む必要はないと、両親と揉めたときに助けてくれたのが祖母だった。お盆や正月に家族と一緒に帰るといまだにお小遣いをくれて頭が上がらない。

最後に会った時も就職活動について心配していたので直接報告して安心させてあげたかった。

早速番号を押し何度かの呼び出し音の後に通話先の受話器を取つたのが分かる。

『もしもし?』

「あ、お祖母ちゃん? 悠斗だけ?」

『コウちゃんかい? どうした?』

「ああ、内定を貰つたから報告をね」

『あら~! 良かったね~!』

「うん、ありがとう」

お祖母ちゃんは田舎詫りのある声でお祝いの言葉をくれた。言葉が弾んでくる事からも心から喜んでくれている事が分かる。自然と自分も嬉しい気持ちになった。

直接報告して正解だったな

『じゃ、詳しい事はお祖母さんに帰つた時にでも話すよ』

『あ、コウちゃんひとつと待つて』

そのまま通話を切らつとあるとお祖母ちゃんに止められた。

「ん、どうかした?」
『えーとねえ……、無事内定も貰つて来年コウちゃんは社会人でしょ?』

「まあ、無事卒業出来ればそつなるね」

しかし既に必修以外の卒業に必要な単位は全て取っているため余

り心配する必要はない。」の調子だと四年の後期も碌に学校に行かなくても卒業出来るだらう。心底一年から三年まで眞面目に勉強していくよかつたと思つ。

『それでね、今まで黙つていたけどウケやんにはね許婚がいるのよ。 本当は卒業するまで言わなこつもりだつたんだけど』

『…………ん?』『メンもつ一回言つてくれる?』

疲れてこらんだらうか、何かお祖母ちゃんが変な事を言つた気がする。

『だからね、ユウカちゃんは許婚がいるのよ』

「とつとつボケましたか御婆様」

『まだまだ若い者には負けません。 信じられないのは分かるけど詳しい話をしたいから今度の十日以内に来てくれない?』

「うそ、お祖母ちゃんは俺のボケも華麗にスル。え? ていうか

……

「…………マジなの?」

『マジもオオマジ』

無理して若者の言葉に合わせるも田舎艶つのイントネーションでおかしな肯定だったがそれがトドメだった。

「おーっ！」

俺にとって内定を貰い、限りなく最高の日になつたその日、それは今まで知らなかつた許婚の存在を知る日でもあり

俺にとってかけがえのない日々の始まりでもあつた。

「許婚つていいよなー」

「ぶふつ！！」

「ああ？ 丘村の奴は何言つてんだ？」

祖母から唐突に許婚の存在を教えられた翌日。俺は内定を貰つた事を先生や学校に報告するために大学に来ていた。

一通りの報告を済ませて研究室を覗いてみると、友人の丘村と藤田がいるのが見えたので折角だからコーヒーでも淹れて一息していくことにした。

俺の所属する研究室では四年が十人いる。

三年が正式に入つて来るのは夏季休業後なので再来月まではこの研究室には四年しかいない事になるが、その四年も半数は就活で忙しく、余り顔を出さない。

この研究室の教授はかなり優しい方で、就活が終わるまで新しい課題を出さないので全然出席していいからと課題とか単位の心配もしなくて良い。俺も前期はそれにかなり助けられた。

そんな研究室の中で特に親しいのが今、目の前にいる丘村と藤田だ。

大学一年からの付き合いで、ちょっと肥満気味なオタクの丘村と

金髪でヤンキー気味の藤田は普通に生活していたら絶対に友人にはならなかつたと断言しても良い。

工業系の大学に通う学生は極端に三つに分類出来て、オタクとヤンキー、そして普通っぽい人が共存している。そのため少々全体の雰囲気が独特だつたりする。そんな中で綺麗に三つの各派閥にはまらず仲の良い俺達三人は大学内でもかなり珍しいだろつ。

まあそつなつた原因といつか出来事もあるのだが、今は置いておけ。

問題なのは丘村が今言つた発言である。

余りにタイムリーな話題過ぎてコーヒーを噴き出してしまつた。

「良いじゃん。 許婚つて憧れない？ 俺は彼女より“嫁”が欲しいんだよ。……出来れば一次元のだと尚良いよね」

「ゲッホ！—ゲホゴホ！—」

「お前が変なこと言うから西城が咳き込んだぞ」

確かに丘村が言つたことに驚いたのも確かだが、一番驚いたのは昨日の今日で“許婚”という単語を聞いたからだ。

オタクの丘村は偶にこんな話を振つて来る事がある。いつもは適当に流すか返すが、今回ばかりはさり気なく丘村の意見を聞いてみたい。

「ゴホッ……。丘村は何でいきなりそんな話を？」

「ん？ 昨日買つたラノベに許婚設定の女の子が出てきてね、その子がめちゃくちゃ可愛いんだよ」

「ラノベ……。設定とか身も蓋もないがそういうえば最近小説やドラ

「マも観てないし、架空の話でも参考くらいにはなるかもしされない。
ぶっちゃけ非現実的過ぎて昨日の電話は直ぐに切つてしまつたが、
現代の許嫁の扱いはどうなつてゐるんだろうか……？」

「小説で許嫁つて珍しいのか？」

「いいや？ 貴族とか権力者が出てくるファンタジーとか、社交界とか上流階級が舞台の現代物、後は歴史物やコメディだと一般の小說でも珍しくないよ？」

「うん、俺の家は別に金持ちでも何でもないし昔からの仕来たりが残る由緒正しき家でもない。先祖が偉い武将だつたという話も聞かない。ハツキリ言つてどれも当てはまらない。」

唯一、曾祖父がそこそこの資産家だつたという話は聞いている。
戦争で亡くなつた人達の為に慰靈碑を建てたり、祖父母の住んでゐる地域に高速道路を通す為に尽力したとかで曾祖父だけは地元で有名人だ。

しかしそれも昔の話。そこから許婚の話に繋がる可能性は無いだろつ。

正直この問題を一人で考えるのは限界がある。俺の家庭事情を知らない丘村と藤田に話しても困らせるだけとは思うが、ひょっとしたら参考になる意見が聞けるかも知れない。

だがここでも問題がある。

「丘村は現代でも許婚つてあると思うか？」

俺の発言にどれだけ信憑性があるかだ。

この話の流れで「俺、実は許嫁がいるんだー」なんて言つても凡

談にしか聞こえないだろ？

だから質問の返答で判断することにした。流れ次第では打ち明けるタイミングがあるかもしね。

「ないよ、絶対」

しかし丘村にバッサリと全否定された。当然、打ち明けることなど出来なくなつたと言つていい。まあ普通はこうこう反応だろ？と、ここで俺と丘村の話を聞いていた藤田が会話に入つて来た。

「珍しいな、丘村がそこまで断定して否定するなんて。オタクなんだからそういうのは信じたりするところじゃねえの？なんか根拠でもあんのか？」

「オタクだからって言つのは納得いかないけど……。まあ時代が違うつてもあるよ。でもね、小説で取り上げられる許婚が上流階級の話ばかりの様に今の許婚つてどちらかといつと政略結婚に近いと思うんだ。そりやあ日本の何処かには親同士が決めた許婚がいる家庭もあるだろうけど……、それこそ数は少ないじゃないかな。許婚でも結局別の人と結婚することもあるだろうし」

……政略結婚か、それは考えていなかつた。でも幾ら考えても俺と許婚になる事で発生するメリットはない気がする。

そういえば許嫁つて“親同士”が決めた相手だつたつけ。なんでお祖母ちゃんが俺に教えたんだろう？

これは親父辺りから聞きださないといけないな。

その後も丘村と藤田に色々許婚について話をしていると流れに丘村も疑問を抱いたのか「そういうや今日はやけに臉いつきが良いけど、西城は許婚に興味でもあるの?」と、質問してきた。

丘村にそう聞かれ俺は思案する。これは打ち明けるチャンスなのだろうか?

『いいで考えてみよ。』

この場で俺に許婚がいるらじことうことを事を打ち明けるどうなるか。

『あははは! 面白い冗談だね! 頭大丈夫?』

『この暑さでとつとう頭が逝っちゃったか……。むづ就活は無いんだ、ゆづくつ休め』

……百パーセント信じて貰えないだろう。

だつたらとる行動は一つしかない。

「ああ、内定貰つて気分が良いから偶には丘村の話も聞いてやらないとな」

「ははは、それ内定を貰つていかない丘村への嫌味だろ」

結局誤魔化すことにした。

言つても信じて貰えないだろうし、今じゃなくても、その内ちゃんと話せる機会もあるだろう。

土口は許嫁の件でお祖母ちゃんの家へ行かなくてはならないし、今日は早めに帰つて休む事にしよう。

藤田の悪いのは予定外だが丘村も特に気にはしてないし、帰るため椅子から腰を浮かせる

と思つていたが丘村の目がキラリと光つた。

「ふつー、良いだろ？、なれば今日は命一杯話を聞いて貰おう。」

「え？」
「ん？」

俺と藤田の動きがピタッと止まつた。

嫌な予感しかしない上に丘村はポケットから手帳を出してパラパラと高速でページを捲り何やら確認している。

俺は藤田と目線を合わせて逃げる会図を送つたが、遅かつた。

「ではまず、男の娘の素晴らしさについて一時間ほどーー。」

「男の……、娘だと……ーー？」
「に、一時間！？」

……墓穴を掘つたらじつに。残念なことに丘村の目は止まらない。

藤田も顔が引きつっている。

結局解放されたのは3時間後で、一息つく為に立ち寄つた研究室で余計に疲れる羽目になつた。

そして土曜日。

俺は高速道路をバイクで北上していく。

普段は親父が運転する車で通る道をバイクで通るのも変な気分だ。そもそもバイクは藤田とツーリングに行く時しか乗らないのでバイク自体に乗るのが久々だつたりもする。しかも何故か俺一人ではない。

「兄貴、着いたな！」

「……ああ、着いてしまった」

丘村から解放され家に帰った後、俺は直ぐに親に電話をして許嫁について聞いてみた。一瞬間を置いた後「ああ、そんな話もあつたな」と流され呆然とした。しかも確信に触れる相手の事とか経緯等は一切聞き出せなかつた。

一人暮らしをする時はムキになつて反対していたのに、何故か許婚の話はアッサリとしている。

……ていうか当人である俺へ説明不足にも程があるだろう。

そして話を聞いていたらしい弟が面白がつて着いて来た。

弟は哲史と言い、俺の一つ下で俺とは違う大学の三年だ。今年から俺が最近終わらせたばかりの就職活動を始める予定だが、俺のよ

うに一人暮らしせず自宅通いのため金銭に余裕があるらしくお気楽にも毎晩遊び回っている。

そんな哲史だが今回の話には興味を持つてゐるみたいだ。多分次の飲み会とかでの話の種にでもするつもりだろう。

「哲史、お前が何を期待しているか分からぬけど、俺は許婚の話は断るからな」

「えー！ 何でだよ勿体無い」

「テメエ……、面白がつてゐるだろ?」

「あ、わかる?」

弟は完全に野次馬根性で着いて來たようだ。取り合えず弟の頭を殴つてから家のドアを開ける。

哲史との会話でサラリと言つたが、色々考えてこの件の話は断るという結論に至つた。親同士が決めたことだが、結局は本人の意思の問題だろう。相手の人も案外無理やり話を出され嫌々で従つていいだけかもしれないし。

そもそも詳しい事を一切話さない両親に不信感があるのも確かだ。なんと俺はまだ相手の名前すら知らないのである。

別に付き合つている彼女がいるわけでもないから許嫁が出来ても困る状況にはならないが、やはり現代社会で許嫁というのは上手くはいかないだろう。

つまりこの話は断るのが最善。まあ既に親同士が了承しているので許嫁という関係や繫がりは変わらないかもしれない、だが相手本人と直接今後の対策なり対応の話しをした方が意思の疎通が容易になりお互い後腐れ無くこの話しを無かつた事に出来るだろう。

俺が今日此処に來た目的はそんなところだ。

「ほんにちはー！ 悠斗と哲史です。」

「お邪魔しまーす」

外に見慣れない車が止まっていたので接客中かと思って勝手に中に入ろうかと思ったが直ぐにお祖母ちゃんがやって来た。

「ユウちゃんにサトシちゃんもよくきたねえー。そ、早くお上がり。
相手の人も待つていいからね」

「……ああ、詳しい話だけと言いつつ本人も来ていると

「くつくつく、頑張れよ兄貴」

もう一回弟の頭を殴つてから俺は相手の人が待つ部屋へと足を踏み入れた。

何はともあれ、先ずは今日お祖母ちゃんに俺の意思を伝えて、後日相手の人を呼んで貰おうとしたが手間が省けたようだ。

さて、情報が一切ない噂の“許嫁”はどんな人物かな。

お祖母ちゃんの家に入るといつもの居間ではなく、曾祖父の代から使われているという今では滅多に使われない客室に通された。と言つても田舎の客室なんてそれ程立派な物じゃない。高そうな絨毯も無ければ立派なソファーなんて物も無い普通の畳み張り部屋だ。精々誇れるのは部屋から見える限りない緑の景色と見栄を張つて買つたであろう座り心地の良い座布団くらいだと思う。

客室に入ると一人の女性がチョコソンと座つているのが目に入った。恐らく彼女が例の許婚なのだろう。丘村の影響で許婚イコール金持ちだつたり、凄い美女とかを想像をしていたが我ながら馬鹿だつたと思う。彼女の印象はどちらかと言つと田舎の型にハマつている格好で地味な部類に入る。顔だつて俺が言えるような立場じゃないが美人と言う様な感じでは無い。それこそ可も無く不可も無い“普通”と言つた顔立ちだ。しかし髪の長さには目を見張つた。座つているのに畳に届きそうだと言う事は腰ぐらいまであるのだろう。これは都会と田舎の両方で珍しい部類に入るんじゃないだろうか。

ようやく彼女の情報を幾らか得たが俺にはもう関係ない。相手がどんなに美女だつたり好みの女性だろうが俺は既にこの話は無にして貰おうと決めているのだ。相手が如何に好みの女性でも俺は一度決めた事を変える気はない。

「ユナちゃん待たせたねえ。今、ユウちゃんを連れて来たからね

「「んにちは、西城 悠斗といいます」

「「、こんにちは。えと、三塚 由奈と申します……」

「……」

取り合えず挨拶はしておいた方が良いだろ？と思つて挨拶したら相手も詰まりながらも挨拶してくれた。ここで初めて許婚の名前が三塚 由奈だと言つ事が判明。聞き覚えの無い名前なので丘村から借りた小説の様に昔の知り合いとか幼馴染といったオチは無さそうだ。つまり俺にとっては本気で見ず知らずの他人と言つ事になる。そして哲史が挨拶しないと思つたら部屋に入つて居らず、裸の外に待機していた。だが盗み聞きする気満々である。あの野郎……。

「（兄貴、グッタラック！）」

「（失せろ）」

哲史はビシッと親指を立てサムズアップするが俺は冷えた視線を飛ばしこの場から失せるように念じる。しかし哲史は気付いてないようで全く効かなかつた。後でまた殴るつ。

何はともあれ、俺とお祖母ちゃんも見栄を張つた分座り心地の良い座布団に座つた。俺と三塚由奈が向かい合つ、俺のお祖母ちゃんと相手の付き添いの人気が向かい合つ。まるでお見合い様だがドラマ等で見たお互いの格好や場所、雰囲気が全然違うためやっぱり違うんだと思った。そして相手の付き添いの人も両親という感じではなく祖母という感じだ。いよいよ怪しくなつてきた。

「えーと、俺は今回の経緯について何も聞いていないんだけど、そろそろ教えてくれない？」

「え？ 全く聞いてない？」

「うん」

「アイツを何考へてゐるんだべ？」

アイツと言つのはたぶん俺の親父だ。俺の説明要求にお祖母ちゃんが首を傾げるがそんな俺が聞きたい。しかもお祖母ちゃん東北弁に戻つてゐるよ。聞き取りづらくなるから標準語に戻して下さい。そして俺とお祖母ちゃんの話を聞いていた相手の御婆さんがその言葉に反応したようだ。

「つまり悠斗君は全然知らなかつた？」

「ええ、そうです。三塚由奈さんの名前もたつた今知つたくらいですから」

「それは変だねえ。ユウちゃんに許婚の事を教えるのを頼んだのはアイツなのに」

俺が相手の御婆さんに返事をしていると隣のお祖母ちゃんからまた新事実が発覚した。お祖母ちゃんは自分の息子、俺の親父をアイツと呼んでいる。つまり俺が親父に電話で質問を流されたときは親父はお祖母ちゃんに許婚の件で頼み」とをしている筈で、知らない訳がないのに知らなかつたかのよつた反応をしたのだ。

親父の意図が不明である。

「……分かつた、その件は親父に直接聞くとして、今日は何をするつもりだつたの？」

お祖母ちゃん達は経緯や事情を知つてゐる様なので深く追求すれば聞けるかもしれないが、俺は既にこの件は断ると決めている。経緯や事情を話さなかつたあの親父は後でキッチリ問い合わせるとして、さつさと要件を聞いて断るタイミングを計つた方が良いだろう。と思つたが……。

「本人同士の顔合わせとー、今後の打ち合わせとー、結納の話とか
？」

「ちよおおおおおおおおおおおと待つて下さい。」

最初の一一つは良いだろつ。何も初対面で結婚ということは無いだろうし。しかし最後の結納、これは問題だ。結納と言つても実際何の事が分からぬ人も多いかもしないが、結納とは結婚の確約に伴なう儀式の一つだ。これを行うと「結婚をします」という約束を正式に交わした事になり婚約者同士となる。そのあとで婚約破棄する最悪慰謝料も発生する。つまり断るとしたら今じやないとトントン拍子で日程が決まり何も対策が出来なくなつてしまつ。

「まず本人同士の気持ちは確認しないんですか！？」
「ゴウちゃんについては大丈夫だと言われたけど？」

誰に、とは聞かなくても分かつた。あの糞親父め……、人の性格を熟知してやがる。確かに俺は別に許婚が出来ようと全然構わない。付き合つていてる彼女でもいれば色々変わるのだろうが、今まで女性と付き合つた事も無い。俺は恋愛自体に興味がないのだ。だからと言つて結婚したくないと考えてる訳ではない。いつかは誰か、と考える時は沢山ある。だから親が勝手に結婚相手を決めたと言われても実は全然抵抗感が無かつた。

しかしそれは“今”じゃない。

「仮に俺は良いとしても、三塚さんの気持ちの確認も」

「あ、私は大丈夫ですよ？」

「お熱いわねえ~」

な、何だ？

何が起こつた？

お祖母ちやんと御婆さんはウフフと氣色悪い笑みを浮かべてゐる
し、襖の外にいる哲史は期待の眼差しでこひれを見ているのを感じ
る。

……失敗した。

俺の性格や気持ちがどうであれ「うー」の話は断るのは既に決めた事だ。遠まわしに三塚由奈に俺が断りうとしているのを察せさせるつもりだったが、もつと強く直接的に言わないと駄目らしい。

因みに俺はこのとき、三塚由奈の返答に動搖していました。何故相手がそんな返事をしたのかに全く思考が至らなかつた。

「お祖母ちゃん」

「カツカツ、どうしたの？」

「俺は来年から東京です」
「やうね」

「ソフトウエア会社です」
「大変そうね」

「給料少ないです」
「甲斐性無し」

「う、うるさい！」

まあ、と言つても初任給の話だ。実際に働いた事があるわけではないのでその後の給料がどうなるかは知らないけど、一年目はそれ程大きく変わる事は無い筈だ。

「つまりですね、来年は色々あって結婚はまだ早いと想つんですけど。実際いきなり聞いた話でしたし、ここは一旦許婚の話しさ白紙にして

「うーん、つまりコウちゃんは一人で生活するのが不安つてわけね？」

「は？ だから許婚の話しさ？」

「なら大学の卒業まであと半年あるわけだし、その間に一緒に住んでみて練習してみたらどうかしら」

さつきから人の話に被せてきやがって……。

そして今、相手の御婆さんはなんと言つた?
大学卒業までの半年を一緒に住む?

話しの流れについていけないぞ!

「あら~、それは良い考えね~」

「でしょ~?」

「いやいやいやいや、それは問題があるでしょ~? それに俺の部屋はそんなに広くありません」

三塚由奈の歳は知らないが、俺だって二十一の男である。いろんな意味で一人暮らしなど出来る筈も無い。

「部屋の広さは実際生活してみて判断すれば良いし、貴方達は許婚なんだから問題なんてないわよ」

東京に行くまで後半年だと言つのに狭かつたら引っ越せと申しますかこの御婆様は。それに許婚だらうと今日初対面の二人が一人暮らしなど問題ない訳が無いだらう。などと思案していると肩をチヨンチヨンと叩かれた。

「えーと、西城さん?」

「ん?」

「ここまでずっと黙っていた三塚由奈が俺にコツソリ話しかけてき

た。

「ああなたつたら御婆ちゃんは止まりません」

「……どこか友人を思い出すけどそれは同感だよ」

オタク話になると止まらない友人の事を思い出し、げんなりとしながら頷く。そして三塚由奈は驚きの言葉を放つ。

「JJKはお祖母ちゃん達の話に乗りましょ」

「ええー!? な、なんでー!?」

「まず、JJKの話し合いを終わらせないと話がドンドン進みます。なら話を合わせて終わらせ、後でお祖母ちゃん達を抜きで今後の対策を練つた方が良くなりませんか?」

「……確かに」

三塚由奈は発言が少ないため内気な性格と思つたが結構大胆な行動を起こす人のようだ。俺は彼女への見方を改めた。

「西城さんは今日JJKに泊るんですね?」

「うん、そのつもりだ」

「では明日の今と同じぐらいの時間にここから北に真直ぐ行つたところにある空き地に来てくられませんか?そこで今後の話し合いをしましょ」

「わかった」

彼女自身が許婚の件についてどう思つてゐるかは分からぬが、この場で話し合いをする気はないようだ。俺も変な方向に進む話し合いは終わらせた方が良いと判断したので先程三塚由奈と打ち合わせした通り、お祖母ちゃんの話を了承した。

その後は先程までが嘘の様にすんなりと話しが終わった。

今後の予定とか結納とかが半年の共同生活の件で今話し合わなくてもなくても良いだろうと判断され、思ったより話す内容が無かつたからだ。

「では明日お待ちしますね？」

「ああ」

帰り際に三塚由奈は俺にだけ聞こえるように囁いて御婆さんと車で帰つていった。ふと後ろを振り返ると哲史がいた。

「兄貴よお、どうすんの？」
「わからん」

哲史も心配してくれているのかそんな言葉を掛けて来た。断りつにも何故か一人暮らしをする事になつてゐるし、その前までは結納の話しまであつた。俺が思つてはいるようこの件に皆本気なのかもしれない。

「俺的にある子、ちょっと弄れば綺麗になると思ひます。」
「そういう話かよーー。」
「ぐはつーー？」

そうだ、コイツが俺を心配するなんてあり得ん。

少しいつもより強めに殴つて俺は今後の事に頭を悩ませるのだった。

辺りが夕焼けで紅く染まる時頃、俺はお祖母ちゃんに買い物を頼まれスーパーへ買い物に来ていた。

田舎　　地方のスーパーや電機屋、本屋等は消費者が買い易いよう密集する傾向にある。スーパーが一二件や三件密集しても別に良い事などは無いのに、何故か友人の藤田とツーリングで色々な所へ回つても何処も同じ傾向が見られた。お盆やお正月は人で溢れかえるので余り移動せず物を揃えられるのは助かると言えば助かるのだがそれ以外の日はがらがらだ。

しかも密集する場所が悪い。ここはお祖母ちゃんの家から車やバイクでも三十分掛かる。一応ちゃんと塗装された道路は通っているし一本道なので歩きや自転車でも行けることには行ける。だが途中に恐ろしく急な長い坂道があるため俺も弟も挑戦したことは無い。挑戦すれば俺と弟でも一時間は掛かるんじゃないかと見込んでいる。行つたら行つたで帰りもあるし、そう思つと挑戦する気も起きないと言つもんだ。

「兄貴、こんくらいでいいんじゃね？」

「だな。……しかしあいな、全部積めんのか？」

「まあバイク一台なら何とかつて感じだな。帰りは下り坂だし、スピードは出さない方が良いと思うけど

スーパーが気軽に行けない所にある関係上お祖母ちゃん達は余り買い物が出来ない。お祖母ちゃん達は車を持っていないし自転車も漕げない。特に車に関しては年齢的にもう乗らない方が良いと判断して自分から乗るのを辞めた。自分はともかく誰かに迷惑を掛けるかもしれないからだと。全く、全国の事故を起こす運転者にも見習つて欲しいね。

「話が逸れたがつまり買い物が出来るときはおとめ買い物になつてしまい荷物が多くなつてしまつのだ。

「早めに冷蔵庫に入れないといけないのは俺が一足先に持つて行くから兄貴は電機屋で他の買い物宜しく」

「なんだ？ 殊勝な事言いやがつて。悪い物でも食つたか？」

「ええー？ ただ刺身とか痛ませたくないだけなのにそんな反応されるの？」

「あー、はいはい。 分かつたからせつと行け」

「ひでえなあー」

要冷蔵の食材を持つて一足先にお祖母ちゃんの家に帰る哲史を見送り俺は足早に電機屋へ向かつた。

何故足早かと言つと去り際の弟の口元が妙にニヤニヤして気になつたからだ。あれは間違いなく何か悪い事を企んでいる。

電機屋に入ると冷房の冷たい風が肌を撫でる。

外の暑さが嘘みたいに感じる店内ではスーパーと同じく全然客がないなかつた。

しかも商品の並びが雑で何処に何があるのかも分からぬ。

「すいませーん」

「はいはいー」

仕方なく店員さんを呼ぶ事にした。店員さんも暇だつたのか直ぐに来てくれた。

明らかに店長みたいな格好の人が来たのは予想外だつたが……。年齢的には俺とそう変わらない様な男の人だつた。

「これと同じ電球と蛍光灯と電池の場所をお聞きしたいのと……、あと扇風機の配達をお願いしたいのですが」

「少々お待ち下さい」

電球や蛍光灯はお祖母ちゃん達が暮らしている家では生命線とも言える。お祖母ちゃんの家の近くには道路灯が無いので切れると本当に真っ暗なのだ。まあ寝るのが早いようなので余り実害はないように見えるが食事時などに電灯がチカチカしていると結構つらい。別に家中の電球が切れた訳じゃないので沢山買わなくてもいいかもしけないが、買い溜めしておかないと俺と哲史が帰つた後に電灯

が切れた時困るかもしないと思い余分に買つていいく事にした。

扇風機は単純に来客用 この場合は俺と哲史が使う部屋に置いてある扇風機が壊れているのが発覚し買つことにしたのだ。お盆に家族で寝泊まりする時にも使うと思われるので無駄にはならないだわい。

まあ、届くのは明日なので俺と哲史は今回は一回も使わずに帰るのだが。

「では此方にお名前と住所をお願いします。電球と蛍光灯も一緒にお送りしますか？」

「いえ、そつちは持つて帰ります。」

店員さんから場所を聞き、会計を済ませた俺は扇風機をお祖母ちゃんの家に届けて貰うためにお祖母ちゃんの家の住所と俺の名前を書いた。

紙を受け取った店員さんは一瞬驚いた表情をして聞いて来た。

「西城悠斗？ ひょっとして“坂向いづの西城さん”の家人か？」

「……たぶんそうですね」

“坂向いづ”といづのは例の長い坂を境目としたお祖母ちゃんの家がある側をやしてこむ。更に曾祖父がこの辺では有名だったため

高齢の人に名前を名乗ると偶に似たような反応をされる。

しかし若い人　俺と余り歳が変わらなそうな人にそう言われる
のは初めてだ。

「そうか、たしか今日だつたっけ……。にしても偶然つていうのは
……」

「……？」

店員さんは何やらメモを見ながらブツブツと呟いていた。俺と同じくらいの歳で“坂向こうの西城さん”という名称を知っている店員さんが少し気になつたので名札を見てみる事にした。

田舎　　地方では偶にあるのだが、自分は知らないのに相手は自分の事を知つてているという状況が何度かある。地方での人間関係の繋がりの強さを表しているのかもしれないが、実際話しかけられる方としてはかなり困る。

まず、挨拶したくても相手の名前が分からぬ。

なのに大学に入った時や成人式等ではお祝いを貰つてしたりするので、お礼を言わないといけない。しかし電話で名前も知らない人にお礼を言つのはとても複雑だった。

だからいや、名前を確認してお祖母ちゃんに知り合いか確認しようと思つたのだが……。

「（あれ、三塚……？）」

名札には三塚と書かれていた。

三塚どころか名字はこの辺で別段珍しくない。だが、つこたつきまで別の“三塚”と会つていた俺に偶然と言つには余りにも不自然だ。だからとこつて三塚由奈との関連性があるとも言えない。

俺も思考の海にドップリ漫かるかと言つていいほど店舗さんが我に返つた。

「……あー、では明日の面接がございまして時間がかかるのでよろしくお願いします」

「あ、はい。お願いします……」

俺は何となくだがその店員さんの顔を頭に焼き付けていた。“三塚”といつ名字が気になつたのかもしれない。まあ明日にでも忘れるけど。

用事が済めばもう電機屋に長居する必要もない。俺は来た時と同じくお祖母ちゃんの家に帰るため足早に店を出た。

……店を出るまで背後に視線を感じたのはきっと僕のせいだらう。

* * * * *

お祖母ちゃんの家に帰つた俺はまづ丼糸を済へした。

まず、田に入ったのは料理を並べるお祖母ちゃん。

次に歴史とお酒を飲んでこむお祖父ちゃん。

そして

「あの、お邪魔します……」

三塚由奈がいた。少し気まずそうだ。
まあ明日会う約束をしておいてその日に会ってしまったんだからね。
俺も少し気まずいよ。

「どうか何故だ!?」

何故さつも帰ったばかりの三塚由奈がいるー?!

「兄貴おせえぞー」

「……お前か」

さうだ、多分コイツが元凶。スーパーで一ヤ一ヤしていたのはこの事を画策していたに違いない。殊勝な事を言っていたからといって哲史を先に帰したのは迂闊だった。

「いやあ、お互いの親睦を深めるには食事が一番つてね？　お祖母ちゃんに提案したらトントン拍子に話が進んじやつてぞー」

「オマエ、アトデ、ナグル」

「何故にカタマトー？」

事情は分かつた。親睦を深めるためと言われたのならお祖母ちゃんやお祖父ちゃんも賛成したのだろう。

俺は内心で溜息を吐き、仕方なしに三塚由奈と向き合つ。

「さつきは車で来ていたよね？　外には車が無かつたけど、三塚さんの家からどれくらい掛かるの？」

「……車で三十分くらいですね。来る時は私のお祖母ちゃんに送つて貰いました」

「おいおい、普通に遠いだろ……。往復一時間だよ？」

相手の御婆さん、ウチの馬鹿が無理言つて御免なさい……！
哲史は俺が責任持つて殴ります……！

「あれ？　でも確か約束した空き地つて此処から5分も掛からない所にあつたよ、うな……」

「あつ……」

三塚由奈は一瞬「しまつた!」と叫び様な顔をした。

……どうやら俺は三塚由奈に車で三十分掛かる距離を移動させようとしていたらしい。しかも一人で対策を考えると言つていた事を考へると、御婆さんに車を運転して貰う訳にはいかないだろう。

三塚由奈が免許を持つていれば話は別だが、もし持つていたら昼間の話し合いの時の移動で御婆さんに運転させたりはしないだろう。御婆さんも見たところ俺のお祖母ちゃんと同じぐらい高齢だつたし、見ていて冷や冷やした。

しかし、となると空き地で話し合ひるのは見なおした方が良いだろ。

「二人共、早く座りなさいー」

「ああ、やうだね」

「はー」

お祖母ちゃんに言つられて俺と三塚由奈は料理の置かれたテーブルの前へ座つた。奇しくも俺と三塚由奈が隣合せになつた。お祖母ちゃんの家のテーブルは結構大きいのでぶつちやけ隣り合つて座る必要も無いんだけどね。

でもここにその事を言つたらまるで意識してこるよつて捉えられ

そつなので黙つていい。別にならないし。

「兄貴、刺身無くなるぜ」

「あ、テメエ半分以上食つてんじゃねえか！？ つづかこの盛り合
わせ七人前だったのにどんだけ食つてんだ！！」

「俺の家は刺身なんて滅多に出でこないからな、食い溜めしておか
ないと」

「一人暮らしの俺の方が食べる機会少ないわーー！」

その後は和氣あいあこと食事が進んだ。

「ふーん、三塚さんは一八歳なんだ？」

「はい、今年一九になりますけど、進学はせず自分で家事の手伝い
や烟のお世話をしています」

ねりねり。

うん、食事の場だと話が進む。簡単に歳や今の状況を聞き出せた。雰囲気がそつとわかるのか三塚由奈も質問を絶やさない。

「西城さんは大学生なんですね？ どんな事を勉強しているんですか？」

「情報工学かな。 プログラミング言語とかアーキテクチャとか基礎の」

「？？？」

ねるねる。

三塚由奈は理解しようと一字一句逃さないように聞いていたようだが傍から見ても頭の上にはてなマークが浮かび揚がりそうな程、難しい顔をして首を傾げている。

まあ知らない人に言つてもこんな反応だらう。前に家族全員同じ反応されたので慣れている。

「けつ、理系はこれだから

「黙れ経済学部。今は手に職があつた方が便利なんだよ」

「つあー、就活やりたくないー」

そう言つと哲史は現実逃避のつもりか、次のお酒を取りに居間から台所の方に向かつた。

就活に関してはたぶん俺の様子を見ていただけ余計に不安があるので。ううつ。まあ、相談されたら相手になつてやらない事も無い。

ぐつぐつ。

うん、こんなものだうつ。

「……といひで、西城さんはさつきから何をやつていいんですか？」

「山葵ワサビと生姜とタバスコタバコとからしとその他もろもろを混ぜた特別醤油」

余りに微量で見た目は変わらない。しかしその中身はえげつない威力を誇る俺の長年の経験が成せる作品だ。

「……何故それを弟さんの醤油と取り換えるのです？」

「え？ 何のこと？」

台所から戻つて来た哲史がそれを使ってビリなつたか言つまでも無いだうつ。

とりあえず笑いの絶えない食卓だった。

時計の針が九時を回った頃、テーブルの料理は片付けられて皆でお茶を飲んでマッタリしていた。

「何故か哲史は青い顔をして沈んでいたが、オレ、ゼンゼン、シラナイ。」

「三塚さん、時間大丈夫?」

「あ、そうですね。そろそろお祖母ちゃんに電話して迎えに来て貰わないと……」

「兄貴、バイクで送つてやれよ……。メットは俺の使つて良いから……」

「それは良いねえ。ユウちゃん、是非送つてあげなさい」

「それよつお祖母ちゃん……、醫薬無い?」

案の定三塚由奈は帰りも、車で送つて貰ひりし。それで哲史は死にそうな声で俺に振つて來た。

「え? でも……」

「いや、送つていいくよ。道も暗いし、こんな時間に御婆さんに運転されるのも危ないよ」

酷い言いようかもしれないが本当の事だと思つ。哲史は俺を上手く嵌めた積りだろうが、俺は始めからその事を見越して哲史とお祖父ちゃんがお酒を飲んでいても付き合わなかつたのだ。

それに、結果的に一人になるので明日の約束まで待つ必要も無く今後の対策の話が出来る。

俺は哲史のバイクからヘルメットを取りそれを三塚由奈に渡した。三塚由奈もそれを戸惑いながらも受け取つた。

「丁度良いから明日の件の話を今したいけど……、時間は大丈夫?」

「そうですね……。そんなに遠くは無理ですが少しなら。私の家の

手前に広場があるのでそこまでお願ひします。」

「分かった。しっかり掘まつていってね」

「はい」

俺は後ろから手を回してしっかり掘まつていのを確認してからバイクを発進させた。

目的地は三塚家の近くの広場だ。

夜とはいえ季節は七月の中旬、まだまだ蒸し暑い。そんな中、俺と三塚由奈はとある広場で向かい合っている。

結局、あの後バイクで二十分近く走った。三塚由奈の家は、例の長くて急な坂道を超えてスーパー密集地域の方向とは別の道の先に在った。車で三十分っていうのはたぶん安全で遅めに走っていたからだ。

一瞬、何でお祖母ちゃんの家の近くの空き地じゃ駄目なのかと思つたらバイクでその近くを通つた時に直ぐ分かつた。唯でさえ少ない道路灯がその周辺には全く無く、広場は見ていて不安になるほど暗闇に包まれている。

三塚由奈が指定した広場には明かりが適度に灯つてあり相手の顔を見れるくらいには視界も確保出来る。この広場は集会場の前にあり、夏休みシーズンには余り規模は大きく無いがお祭りも行われる。お祖母ちゃんの家の近くの空き地は昔から誰も住んでいなく、近所の子供がボールなどで遊んでいるのが精々だ。道路灯の数の違いはその辺から来ているんじゃないかと思つ。

それはともかく、よつやくこの地に来た本来の目的を果たせそうなのだ。成り行きで夕食を食べたりバイクに乗せたりもしたが、俺

の気持に変化は無い。許婚の話しお件について気になる点は多いが、それは親父から聞き出せば良い。ここが問題なのは三塚由奈自身の考えだ。

「でも、早速毎晩の話の件で話をしたいんだけど……、時間も遅いし幾つか簡単に聞くよ?」

「はい」

既に時間も十時に近い。

相手の御婆さんの家には俺が送ると連絡をしているが余り遅くなると心配するだろう。だから『気になつて』いる事の中でも今直ぐ聞きたい事を聞くべきだと思つ。

「三塚さんは許婚の事を聞いたのはいつ?」

「一年前です。その時ちよつと色々あつて……、その時に私のお祖母ちゃんから聞きました」

「ん? 今、あからかめに言葉を濁したよな?」

その「ちょっと色々あつて」も気にはなるが今は置いておく。時間が限られているし、他に話さないといけない事と聞きたい事は沢山ある。それに、この話が本当なら許婚の話は少なくとも一年前にあつたといつ事になる。

「今後の対策って、三塚さんはどう考えている?」のまごくと俺たちは半年間共同生活する事になるんだけど

「確かに、共同生活は無理があります。私も反対です」

「じゃあ

「ですが、お祖母ちゃんの悲しむ顔も見たくなりました

「……なんで御婆さんが悲しむの?」

「やつと話が進んだつて喜んでいて……、言ことへことこつか……

「……俺のお祖母ちゃんも同じようなもんかも」

「西城さんは一十一歳ですか? 世間的にはもう“大人”な訳ですから、やつとれば力強くて断る事が出来るんじゃありませんか?」

その事については何度も考えた。

彼らなんでも個人の意思を無視して許婚や共同生活を強制される

謂われは無いんぢゃないかと。

「 いつその事、全部嫌だと突つ撥ねればいいのだ。そうすればお祖母ちゃんだつてもう何も言わないだらう。」

「 …… 言つだけなら簡単だけね。」

「 それを行うとしたら色々な物を失う覚悟をしなければならないだらう。そしてその失つた物は簡単には取り戻せない。」

「 俺の場合は事情が全く分かつていなかね。自分の意見を通した場合、誰に迷惑掛けるか分からなかつたんだよ。」

「 例えば、内定の報告をして初めて許婚の話を聞いた時に断ついたらどうなつっていたか？」

「 それは今も分からぬが、色々な人に迷惑掛けただらうといつことは分かる。」

「 …… 西城さんのお祖母ちゃんと少し考えが似てますね」

「 その口ぶりから俺のお祖母ちゃんが車に乗らなくなつた経緯を知つてゐるようだ。しかし別に俺は似てゐるといつた意識はない。多

少回りを見ることが出来る人は必ず考えることだと感づ。

「三塚さんも、成人したとか関係なく無理やりにでも断らない所を見ると俺と同じ事を考えてたんじゃないかと思うんだけどね」

「……そりがもしません」

「三塚さんは許婚についてはどう思つてらる？　Jのままでも良いと思つてらる？　正直な意見を聞きたい」

「それは……、西城さんには申し訳ありませんが私はどうちでも良いという感じです。此処に住んでいる限りそういう人との出会いも無いでしょ？　し、私自身余り顔が良くなないと言つが……」

三塚由奈の意見に俺は一応納得した。毎間の様子を見ると許婚に關して心から反対している様にも賛成している様にも見えなかつたからだ。

あと、本人が言つている容姿は別に変じやない。印象は普通というか地味な部類に入るが哲史も少し弄れば綺麗になると言つていた事もあり、案外整つている方かもしれない。哲史は遊び歩いている所為か女性を見る目に関しては良い方なのだ。

さて、となると俺の意見次第となるわけだが、それはもう出でいる。面と向かつて言うのはかなり勇気がいるが、三塚由奈だつて俺に正直に言つてくれたんだ。俺も正直に言おつと思つ。

「俺は許婚に反対だ。三塚さんがどうって説じやなくて……、俺の恋愛観とか話しても仕様がないから省くけど、どんな人が許婚って言われても断ろうと思つていた。昼間にも言つた通り来年は大変そつだから結婚とかそんな余裕なさそつだし」

「そう、ですか」

言つた。とうとう言つた。

しかし何故だらう？ 僕は人生で告白した事もされたことも無いが、まるで告白された相手を断つた様な罪悪感が暴れまわる。

「……となると、やつぱりびびつて穩便にこの話を終わらせるかですね？ 共同生活の話もありますし……」

「それなんだけど」

お互いの考へてゐる事を確認した事は結果的に回り道にはならなかつたと思う。僕達一人に共通してゐるのは周りの人に迷惑を掛け

なこよつて話を持ち終わらせる事。

まあ、当人である俺達に迷惑を掛け何をつて感じだが、それはもつ性格なので仕方ないと思う。それに、親父達の意図が分からない内に下手な行動は避けたいのだ。

だから俺は三塚由奈の話を聞いて、一つの方法を思いついていた。

「俺は共同生活をしても良いと思う」

三塚由奈が驚いた顔をした。当然だ、最初と百八十度意見を変えているんだから。

問題は山積みだが、それもやり方次第だろつ。お互いの気持ちが向いていないのなら寧ろこれが一番穩便に済む方法じゃないだろつか。

「半年も一緒に住む事になるんだつたら、きっとお互に合わない事も出てくるんじやないかな?」

「あつ」

「それに半年は猶予が出来る訳だからその間に別の方を探せば良い」

そう、お祖母ちゃん達は結婚の前段階の練習として共同生活を提案したのだろうが、これには決定的な穴がある。

何事にも相性という物はある。

俺と三塚由奈が一緒に生活する上で「全く合わない事があつたらこの話を無しにする」と言えば良い。実際に一緒に生活してから言うのだから、合わないと言つ説得力もある。

この方法なら一人は合わないと言つ事で当たり障りなく話を終わらしやがられるだろう。

お祖母ちゃん達の考えの裏を突いた形だ。しかも半年と言う時間がるのでその間に別の方も考えると言つ一段構え。ひとつしたらもつと簡単な方法があるのかも知れないが、親父達の意図を聞いてから判断しても遅くは無いと思う。

「で、でも……」

三塚由奈は決めかねている様だった。何故なのかは大体予想は付くけど。

しかし、もうそろそろ広場に来て三十分になる、もう余り時間がない。

「俺との共同生活が不安でもそれはやり方次第でどうにでも対策が打てるし、もし嫌なら違う案を考えても良いけど」

「う、違います！ 私は此処をずっと離れた事が無くて、その、不安なんです」

俺の予想とは違った。俺との生活が心配と言われなかつたのは少し嬉しいが、その答えに思わず噴き出してしまつた。

「ははは、男と一緒に生活するより都會に行く事が不安なの？」

「あう…………、そりじゃなくて！ いや違わなくて？」

三塚由奈は混乱して慌てふためいたが、本当に俺との生活が不安じゃないのなら説得も簡単だろう。寧ろそりちが不安だつたらどうしようかと思つた。無理に説得出来無いし。

「ああ、ごめん。でもなら尚更言つてみた方が良いよ。俺の住んでいる所も東京や大阪とかよりは劣るけど東北の中では都會の部類に入ると思つし」

「……」

顎に手を当てる必死に考へてゐる。

「最悪、半年間タダで旅行出来るつて割りきれば良こよ」

「……分かりました。や二じまでもいいのなら頑張ってお願いします」

「ううと、こつから一緒に住むとかはお祖母ちゃん達が勝手に決めそ
うだけね。半年間、宜しく」

「ある程度話しあは終わつたと思つ。何か重要な事を忘れている気が
するけど」

とにかくもう夜も遅いのではやべ三塚由奈を家に送る事にした。

「あの、送つていただきてありがとうございます」

「……まあ、もともとは歴史の提案の所為だから気にしないで」

俺は三塚由奈が家に入るのを確認してから広場まで戻りバイクでお祖母ちゃんの家まで戻った。

翌日、俺と哲史はお祖母ちゃんとお祖父ちゃんに挨拶してから高速道路をバイクで南下した。

「兄貴さあ、共同生活でどうしても合わない所があったらこの話は無しにして言つたんだって？」

途中のパーキングエリアでコーヒーを飲みながら休憩していると哲史が唐突にそんな事を言つてきた。ていうか哲史が寝ている間にお祖母ちゃんに言つた筈なのに……。

「……なんでお前が知つている?」

「まあ良いじゃん。それより大丈夫なのかよ？俺的に兄貴と三塚さんはピッタリの様な気がするんだけど」

「そりか……？」

俺と三塚由奈がピッタリと言われても全くピンとこない。

「……ひょっとして兄貴、心中で三塚さんをフルネームで呼んでたりしてない？」

「っ！ お前、エスパー！？」

「いや、兄貴が分かりやすいだけっていうか……、ってマジだったのかよ！？ 呼び方一つでお互いの距離が変わるもんだぜ。今度会つたら名前で呼び合つてみなよ」

「うーん？」

それってどうなんだろ？

俺と三塚由奈の関係はかなり微妙な所だ。半年間一緒に暮らして

許婚の話を無しにするつもりなのではなくてこの距離を縮めたら本末転倒の様な気がする。

そういえば

“お互いの気持ちが向いていないから”と言つて共同生活を逆に利用する事を思いついたが、もし三塚由奈が許婚の話に前向きな事を言つていたら俺はどうするつもりだったのだらうか……。

それでも答へは出さうに無こので俺は答えるのを止め、ローバーの駐き缶を捨てバイクの方へ歩き出す。

舞台は田舎から都会へ

対策（後書き）

田舎編（1）終了。

今さらですがこの作品はフィクションであり、小説に出てくる人物・団体と関係ありません。

都会は怖いといひや？（一）

お祖母ちゃんの家から帰つてから三日後、俺はまた大学に來ていた。

今まで就活で寧ろ大学に來ている方が珍しかつたので、就活が始まる前までの様に大学に來ているのは不思議な感じだ。

とは言つても、夏季休業前で大学もテスト期間中で特にやることもない。

なら何故來たのかと言つと、内定を貰つたからといつ事で俺の研究室の教授に呼ばれたからだ。

「これ、夏季休業が開けたら西城君にやつてもうひトーマだから良くな見といてね」

「……多くないっすか？」

「就活と言つ事で前期は優しかつただろ？」

「……鬼ですね」

「甘い事には何事も裏が在るもんだよ。また一つ学んだね」

俺に渡されたのは分厚い三冊の本と薄い数冊の学会のレポート束だった。

良く見ると親切に付箋が貼つてあるため全部を読む必要は無さそうだが、パラパラ捲つてみると全部英語で書いてあった。

……正直さっぱりわかりません。

俺の分野に限らず大学のレポートと言つのは英語で書かれている事がある。聞いた話だが、学会も英語で発表しろという場合もあるらしい。

「俺の英語の成績つて知つてます?」

「情報系は良かつたけどね」

つて、知つてるのかよ!!

知つていてこの課題つて酷いな……。

まあ泣き言を言つても仕方ない。時間はたっぷりあるのでゆっくり読むとじよひ。

実際前期はかなり楽をさせて貰つた。この教授で無ければ俺はま

だ内定を貰えず苦労していただろう。

「幾つか藤田君と内容が少し被るから、プログラムや数値の確認は一人でやつてくれ」

「わかりました。失礼します」

教授の居る部屋から退室し、帰りつとすると研究室から一度丘村と藤田が出て来た。

御昼時だし、教授の部屋は研究室の直ぐ隣りなので出くわしてもおかしくない。

「あ？ 西城、来てたのなら顔出せよ」

「そうだよ！ 先週は男の娘についてまだ半分も語つて無いのに…！」

「……ヲイ」

「それはともかく、昼飯食いに行かねえか？」

「お、いいね」

折角なので丘村と藤田と一緒に昼飯を食べることにした。

就活が始まる前まではいつもの光景だったが、今思つとかなり懐かしい。

俺の大学の食堂は正直余り美味しく無い、料金も割高で量も少ないと生徒からは不評の嵐で、大学前のコンビニやファミレスの方が混雑するくらいだ。

俺達も懲り美味しく無い物を食べたいとは思わないの少しそ遠出して安さと量が売りのファミレスに来た。

「俺はジャンボハンバーグのライスセットで。西城と丘村は？」

「俺もそれにするかな」

「うーん、悩むけど藤田と西城と同じ物で良いや」

このファミレスは大学からも比較的に近く、周りを見渡してもチラホラ大学生っぽいのが見られる。

何やら参考書やノートを開いている人達が多い。

「そういや今週からテスト期間だっけ」

「俺達四年はあんまり関係ないけどな」

「とか言って、田の前の丘村は必死に勉強している訳だけど……」

「ぐぬぬぬぬぬ……！」

「去年、必修を落としたらしい」

「なるほど」

暫く談笑していると注文していた料理が運ばれてきた。丘村も勉強道具を置いて運ばれる料理を食い入るよう見つめる。

流石に量が多い。三人同じものを頼んだので相手の料理が運ばれるのを待つ事無く同時に食べ始める。

「テスト期間中つて」とはもう少しどで夏季休業期間に入るよね

「大学に入つて四年だが、未だに夏休みと夏季休業つて何が違うのか分からねえ」

「本質は同じだろ。名称が違つてだけで」

「俺達も四年なんだし、最後に皆で何処かに行こうよ」

「お？」

「いいね」

ひょんな事から夏季休業中の話になつた。

そう言えば休み中に遊ぶのも久し振りな気がする。

丘村の提案に俺と藤田も乗り気になつた。

「何處行？」

「海行」つよ、海――」

「……男三人ですか？」

海に行きたいと言つた丘村に対し藤田の的確な突つ込み。

確かに男三人と言うのも妙な哀愁を誘うが、小太りオタクと見た目ヤンキーと特徴無しの俺の三人というのも目を引く組合せだと思う。

「ていうか丘村、就活大丈夫なの？」

「西城、それ今は禁句」

わ、分かつたよ、海でもどこでも行こう

「お客様、店内ではお静かにお願いします」

「あ、スイマセン」

「御免なさい！」

「……」

丘村が叫んだりするので店員さんに注意された。

結局夏季休業中に海に行く事になった。

結果として海に行くのは男三人ではなく数人増えるのだが……、
それはまだ先の話。

会計を済ませて店を出ると藤田が煙草を吸つて一服していた。丘村はトイレに行ってファミレスからまだ出てくる気配はない。

ふと、俺の研究テーマが藤田と少し被つているらしい事を教授から聞いたのを思い出した。

「藤田、俺の研究テーマがお前と少し被るらしいんだけど

「ん、ああ、聞いてる。ちょっとした計算の理論値と実行値が合つてるかの確認だからそんなに急がねえよ」

「ひょっとしてもう終わっているのか？」

「いや、詰まつてる。」

藤田は地元の親族が経営する営業所に内定が決まっていて俺達の中で一番早く就活を終わらせた。その為教授から渡された研究テーマも一番難しい筈だ。その分成績などは加味されているらしい。

藤田自身はヤンキーな見た目と裏腹に努力家なので多分かなり進んでいるのだろう。

藤田は口に煙草をくわえてから煙を吐いた。

「そのうち晴らしにバイクで遠出しようかなって思つてる

「ん？ 何処までだ？」

「北海道。遠いから野宿も視野に入れて寝袋も買つたんだぜ?」

「へえ、本格的だな」

「ああ、海に行つた後にでも行つてへる。……………」
「遅いな」
丘村の奴

「確かに」

「二人とも何してんの？」
「遅いよー？」

「お前を待つていたんだよ！－！」

どういうわけか入り口からではなく全然別の方向から現れた丘村に俺と藤田は突っ込んだ。

その後は大学に戻るという藤田と丘村と別れ俺は帰宅した。

＊＊＊＊＊＊＊

それからまた一日が経ち、そろそろ来てもおかしくないと想つて
いたところ俺の携帯にお祖母ちゃんからの電話が来た。

「もしもし……」

『もしもし、ユウカちゃん?』

「ああ、悠斗だよ。それより俺で電話していいよ……」

『明日の喰事、由奈ちゃんがそつにこ行くから迎えに行かなきなさいね』

「やっばつ

『遅れちや黙目だからね』

「分かつてこるよ」

一緒に住むとなるからには色々相手にも配慮しないといけないだ
んだ。

俺の住むアパートは2DKの家賃4万円。

幸い狭いが和室と洋室の一部屋があるので寝るとさほど別々で良い

だろ？まあテレビとか置いてあるので色々移動する必要があるだろ？が、三塚由奈がどっちの部屋が良いかによつて変えるつもりの為、今は移動せない。

『やつらはアイツから事情は聞いたの？』

「……出張で外国行つてゐるとかで繋がつた。しかも一ヶ月……」

お祖母ちゃんのやつらは俺の親父の事。

お祖母ちゃんの家から帰つてきた時に、まあ取つちめてやると意氣込んでいたのに肩すかしをくつった。

しかも帰つてくるのが一ヶ月後とか、どれだけ待たせる気だ……！

都会は怖いといひ？（2）

翌日、俺は昼頃と言われたので多少早めの十一時に駅前へ待機していた。

本当は着いたら携帯に連絡して貰うようにして俺はその辺の本屋や喫茶店で時間を潰そうと思っていたのだが、案の定というか、予想通りといひか、期待を裏切らず、三塚由奈は携帯を持っていなかった。

しかも何時発進、何時着の新幹線かも聞いてない。

そのため俺は何時に到着するのか分からず新幹線を待つために改札口と睨めっこをするハメになつた。

今も新幹線が止まつたみたいだがそれ乗つてているのかも分からない。

「……暇すぎる」

ふと駅の中を見渡してみるとお土産コーナーや試食コーナーには旅行中と思われる人達が溜まり、スーツを着たサラリーマンや学生

が行き交う。平日の昼間だと言うのには人の流れが途切れる気配は無い。

暫くぼーっと眺めていると後ろからチヨンチヨンと叩かれた。

「い、こんにちは」

「あつ……」

振り向くと其処に居たのは三塚由奈だった。

一週間前に会った時と同じく地味な印象を持たせる服装なのは相変わらずだが、決定的に違うのは髪型だ。

あっちは居た時は自然の儘にしていた、腰に届きそうな長髪を下ろした状態に後ろで髪をゴムで縛っている。

女性の髪型について余り詳しくないが、たしかひつめ髪とか言った気がする。

その為以前会った時と大分印象が変わっていた。

「（哲史が言っていた事は本当だつたか………）」

髪型一つで大人しそうな印象変わらないが、行動的な一面も持たせつつ年齢より少し幼く見える。見る人次第で可愛いとも綺麗とも

言つて差し支えが無いくらいだ。始めに抱いたのが良くも悪くも普通という印象だったの俺は素直に驚いた。

髪型でそれだけ効果が在ると言つ事は服装も変えたりひつなるのだろうか……。

「あの、西城さん……？」

三塚由奈が不安そうに小首を傾げたのを見て俺は我に返った。

俺は三塚由奈から荷物を預かりながら慌てて声を掛ける。

「一週間振り、移動は疲れた？」

「いえ、寧ろ楽しくてずっと乗つていたいくらいでした」

三塚由奈は楽しそうに新幹線に乗つている時の様子や景色の話を話した。乗り物での移動は俺も結構楽しく感じる方なので気持ちは分かる。就活の為に乗つた深夜バスにはもう乗りたいとは思わないが。

「じゃあ荷物はコインロッカーにでも入れて、昼を食べつつその辺を案内するよ。何か必要な物があつたらその時についでに見よう」

「あ、はい」

俺は十一時からスタンバイしているため昼食を食べていないのでお腹が空いていたが、三塚由奈は新幹線の中で食べているかもしれないと思つたが、どうやら三塚由奈も昼は食べていないようだ。

俺は荷物をコインロッカーに預けると、コインロッカーを珍しそうに眺めている三塚由奈を連れて駅を後にした。

* * * * *

駅の外に出ると視界が開けて行き交う人々、車の量が嫌でも目にに入る。三塚由奈はその光景すら珍しいのかキヨロキヨロと周りを見渡している。

「……人、多いですね」

「そりがな？ 此処より東京や大阪の方がもっと凄かつたけど

「私の居たところと比べれば何処も変わりませんよ」

「確かに」

あそこと比べれば此処も十分都会だらう。同じ県内なのに違ひが多い。三塚由奈やお祖母ちゃんの住んでいる地域では小学校に行くのにも自転車が必要だし、自転車に乗るのにヘルメットも被る。後は周りの人は大抵知り合いなので誰かと出会えば自然と挨拶や立ち話に発展するように挙げれば切りがない。

三塚由奈も同じ国、同じ県内に住んでいるが少なからずカルチャーショックを受けているのかもしれない。

「何ていうか……、空氣も全然違うんですね」

「あつちに比べたら緑も少ないからね。直ぐ慣れると思つけど」

そう言つて俺は昼を何処で食べるかを考えながら歩きだす。駅地下の飯処は割高なので避け、全国展開しているファーストフード店に入る。

店員さんの零円スマイルを受けながらカウンターでメニューを眺める。

「三塚さんは何が食べたい?」

「えっと、…… 西城さんにお任せします」

そう言われたので適当に注文して商品を受け取った後、店内で座つて食べるため空いている席を探した。

店内を見渡すと丁度空いている席が見つかったのでそこへ座り、俺と三塚由奈は注文したハンバーガーやポテトを置き、食べ始める。

「…………」いつお店つて修学旅行以来かもしません

「マジで!?

確かにあつちにはファーストフード店は一店も見かけなかつたが、修学旅行つてことはそれ以前は一回も食べたことが無いのかもしない。

薄々気付いていたが、三塚由奈には田舎つ子だけではなく世間知らずな面が在ると言つて良い。常識が無い訳ではないので慣れれば問題は無いだろうが、それまでは余り田舎を離さない方が良いだろう。

「三塚さんはこの後どこか行きたい所つてある?」

「まだ来たばかりで何処に何があるか……」

「そうだね。じゃあ軽く雑貨でも見ようか、共同生活と言つても何が必要か分からぬから、必要そうな物があつたら遠慮なく言つてね」

「はい」

その後はお祖母ちゃん達の近況を聞いたり、この一週間何していったのかを聞きながらハンバーガーとポテトを食べた。三塚由奈は本当に久し振りに食べたのか少しずつ食べていた。

「そーて、じゃあその辺のデパートにでも行きますか

「は、はい！」

「……何故そんなにビクビクしながら周りを確認しているのかな？」

ファーストフード店を探している時から気付いていたのだが三塚由奈はビクビクしながら周りを警戒している感じがする。始めは人の多さ等に慣れていないだけかと思ったが、昼食後も続けば流石に気になる。

それを俺に問われた三塚由奈はその理由を言つた。

「都会は怖いところだから気を付けろって友達が……」

「友達？」

「高校時代の友達なんですけど、二つちの大学に通つてるらしくつて。私もこっちに来る事を教えたたら『都会は怖いところだから気を付けて』と言われたんです」

まあ考えてみれば同じ県なのだし、三塚由奈にも交友関係というものは有るのだろうから友達がこっちに居てもおかしくはない。

なんとなくその友人はいすれ会う事になりそうな予感がするが、どうやら三塚由奈のこの過剰な警戒はその友人の忠告の所為らしい。

その友人も初めて来た時に何か苦労したのか、それとも「冗談でからかっただけなのか、それは不明だが余り変な偏見を持たれても動き辛いし目立つ。

「その友達に連絡して今日来てもいいっ?」

「いえ、西城さんがいますし、その友達は確かテストで忙しい筈ですから」

「あー、確かに」

「私も落ち着いたら連絡するつもりです」

その友人がどの大学に通っているかは分からないが、テスト期間というのは大体どの大学も似たような時期に行われる。俺の大学は今日がテスト期間最終日だが、哲史の大学は来週からテスト期間に入る筈だ。

しかし三塚由奈はそんなに周りをキヨロキヨロ注意して見ていて疲れないのだろうか？

……いや、案外これだけ警戒心を持っていてくれているのなら俺も常に注意して三塚由奈を見ていなくても良いかもしない。

俺の中で友人の言葉を鵜呑みにして体からピリピリするくらいの警戒心を放つ三塚由奈の評価は“純粋で世間知らず”が不動のモノとなつた。

まあ、こっちに居る間に三塚由奈に何かあつたら俺はお祖母ちゃんや御婆さんに顔向けが出来無くなりそうだからある程度の注意は向けなければいけないだろうが、三塚由奈も子供ではないのでそれ程心配する必要はないだろう。

と、考えていると目的の建物が見えて来たので未だ周りを警戒しているであろう三塚由奈がいた方へ振り向く。

「取り合えず今は直ぐそここのデパートで雑貨を つていない！？」

振り向いた先には誰も居なかつた。というか三塚由奈は携帯を持つていないので逸れたら連絡手段がない。一瞬慌てたが落ち着いて周りを見ると特徴的な長髪の主を発見した。何やら看板を持った男に話しかけられているらしい。

「ねえ、出会いカフンって興味ない？ 女性は半額なんだけど」

「え？ ええええー？」

「ひっやーお店の勧誘らしぃ。明らかに怪しき雰囲気の店の勧誘なのでサッサと断れば良いのだが、三塚由奈は急に話しかけられたのか、慌ててながら混乱して戸惑つているだけだつた。

……やはり田舎離れないようにした方が良いだろ？

「三塚さん、大丈夫？」

「はい……」

あの後、慌てて駆け寄った俺は三塚由奈を連れてその場から連れ出した。遠くから見ていたので状況は理解していたが、いざ勧誘の人の前に立つと結構気まずいのなんの。

厚かましくも俺にまで勧誘をしてきた男をかわし俺は三塚由奈の手を引いてその場を離れた。

俺はこの手のお店に入った事は無いが、この道を通る度に開店セールと宣伝しているのは知っている。どこの常に閉店セールを喰つている電機屋より性質が悪いのだ。

「どうか恐ろしいのはこの三塚由奈だ。」

一緒に歩いているだけで怪しい宗教勧誘やボランティアの募金に捕まつた。この辺に住んでいる俺でも半年に一回在るか無いかという勧誘ラッシュを一日で三回も体験した。

三塚由奈はその手の人間を引き寄せた謎のオーラでも出しているんじやないかと本気で思つたくらいだ。そして話しかけられる度に三塚由奈は若干涙目になつてゐる。

「と、取り合えず氣を取り直して其処の雑貨屋を見よつよ」

「……はい」

明らかにさつきより元氣を無くした三塚由奈を連れて俺は駅前でかなりの大きさを誇るデパートへ入つて行つた。

三塚由奈も品物の多さに目が点になつていて次第に先程のショックから立ち直り元氣が出て來たみたいだ。

「西城さん、ところで雑貨つて何を見るんですか?」

「えーと、三塚さんが使う茶碗とか箸とか、その他にも何があつたら纏めて買つておきたいなつて」

「食器なら態々新しいのを買わなくとも私なら大丈夫ですよ?」

「まあ一人になつて何が足りなくなるか分からんし、多少余分にあつても大丈夫だから買つておこうよ」

一人暮らしの関係上、偶に同じく一人暮らしの藤田や自宅通いだ

が丘村が遊びに来る。その場で飲み会をしたり、丘村が持ってきたゲームをしたりと目的は色々だが、その時に会場となつた家の主が食事や飲みの用意をしなければならない為、俺の家にも余分に食器はあるのだが、あくまで宴会用とかで使用するので柄や大きさに統一性がない。

と、いつのは建前で雑な扱いをし過ぎたためビビや傷が付いている可能性が在るので確認するより新しいのを買った方が早いと思つたのだ。

「好きなのを選びなよ。俺も他に何か必要そつな物を探すから」

「はいー。」

なにはともあれ、俺と三塚由奈は今後必要そつな物を購入するのだった。

簡単な買い物を済ませた後、俺達はコインロッカーの在る場所ま

で戻り荷物を回収し、俺の自宅まで移動するため電車に乗った。

「西城さんの家ってどんなところですか？」

「2DKのアパートで家賃4万円。もともと一人暮らしだったから広さは余り期待しないでね。一応狭いけど和室と洋室両方あるよ」

「それも気になりますけど、周りに何が在るのかとかですよ」

三塚由奈がふと質問に俺が答えると三塚由奈は笑みを浮かべながら付けくわえた。

「近くに俺の通う大学があるよ。スーパーやレストランとか、生活する分には困らないけど、周りに駅とかが在るわけじゃないから少し交通の便は悪いかな。まあ、そのおかげで家賃が安いんだけど」

「近くに大学が在るんですか！？ 今度行つてみたいです」

「……まあ機会があれば案内するよ」

大学を案内しても良いが、藤田や丘村を始めとした同じ研究室の連中と俺が所属しているサークルの後輩達に三塚由奈を見られたらどんな反応をされるか、想像に難しくない。

大学内の知人遭遇率は実はそれ程高く無いが、タイミングは考えた方が良いかもしない。

「おつと、次で降りるよ。その後少しバスに乗つて歩くけど、三塚さん大丈夫？」

「大丈夫です。これでもあつちでは農家の手伝いもしていましたから」

「……俺より体力在るかもね」

最近体力が落ちているのを感じている俺は静かに、体力を付けようと決意するのだった。

電車が止まり駅の構内から出ると、タクシーが沢山止まっている駐車場やいろんな路線を走るバス停が目に入る。俺は大学方面行きのバス停へ三塚由奈を促し並んだ。

暫くすると大学方面へ向かうバスが来た。

時間帯とテスト期間中という事もあるのか、俺達以外にバスに乗るのは年配のお婆さんやお爺さんが主で、知り合いと出くわすという事は無かった。

停留所を四つ程通過した時にバスを下車し、徒步で自宅まで向かった。

「あそこに見えるのが西城さんの通つている大学ですか？」

「そうだよ。あ、その角を曲がるとスーパーが在って俺はいつもそこで買い物をしているから一応覚えておいてね」

俺は歩きながら逐一何処に何が在るのかを三塚由奈に教えていた。三塚由奈は携帯電話を持っていないので迷つても連絡出来無い。

そのため慣れない土地で迷子になつたりしない様に詳しく説明しなければならない。三塚由奈も真剣に周辺の位置関係は聞いていたので後で実際に案内をすればこの辺りで迷子になる事は無いと思う。

そんな事を考えている内に自宅に到着した。

「着いたよ、お疲れ」

「此処ですかー」

アパートの隣人は基本的に俺と同じ大学の奴らが多いが別にそんなに交流のある奴じやないし、そこから藤田や丘村といった知人に三塚由奈のことがばれることは無い。

藤田や丘村にもいづれは話す心算だが、話すタイミングは気を付けてないといけない。

常識的に考えて、女性と一人で住むなんて事を言つたらほほ間違いなく邪推されるだろう。

家に入つて荷物を置くと三塚由奈はキョロキョロと家のなかを見回している。まあ特に面白い物は無いけど。

丘村が置いて行つた怪しげなDVDもちゃんとダンボールで封印して収納スペースの一番奥へ隠している。これは俺が望んだ訳ではないの「一人が勝手に置いて行つた物で、ワザと置いて行くのだ。あんな物を大学に持つていく気にはならず、返す機会を窺つていたが結局そんな機会は無かつたため押入れの奥底に封印する羽目になつた。

それ以外は和室にテレビとテーブル、洋室にパソコンや参考書や漫画を入れた本棚と比較的にまともな物しか置いていない。

「三塚さんは和室と洋室どっちが良い？」

「え？」

「いや、流石に寝る時同じ部屋つて拙いでしょ？一応和室と洋室が在るわけだし、それぞれの部屋でつて思つたんだけど」

「……そうですね。私はどっちでも大丈夫ですよ？」

「そう？じゃあ三塚さんは和室にしよう。畳の方が三塚さんも寝易いだろ？」「俺は夜遅くまで課題やレポートをやることもあるからパソコンのある部屋の方が移動する物が少ないからね」

「そうと決まれば和室と洋室で寝るスペースを確保出来る様に何を移動するか考えないといけない。」

俺は何か移動が必要な物は無いか思案していると三塚由奈は冷蔵庫の中を開けて声を掛けて来た。

「夕飯はどうします?」

「あー、冷蔵庫にあるもので手軽に済ませようか?」

「意外と沢山入ってますけど」

「俺は基本ちゃんと料理する方だからね、課題やレポートの期限が近くなつたら適当に済ませるけど」

「えつと、夕飯は私が作つても良いですか?」

「んん?じゃあ、お願ひしようかな。疲れているだらつからそんなに手の込んだ物じゃなくて良いからね?」

「はーーー」

妙に張り切る三塚由奈に首を傾げつつ俺は和室と洋室に布団を敷けるスペースを作るために和室と洋室に入った。和室と洋室を仕切るのは襖のみで開けばそこそこ広く感じるので普段は開けっぱなしで良いだろう。

和室と洋室を覗いてみると特に移動が必要そうな物は見当たらなかった。

「実際に布団が敷けるかチェックしておこうかな」

と考へてピタッと思考が止まった。

よく考えよう、一人暮らしでも食器などは多少余分に持つていてもおかしくはない。

しかし布団は？

藤田や丘村も泊つていいく時は雑魚寝だし、親や哲史に妹も県内の家に居る訳だから様子を見に来ても泊つて行く事は無い。

つまりだ、何が言いたいのかと云ふと布団が一組足りないのだ。

季節は夏なので布団が無くても別に問題はない。

しかし俺が布団無しで寝ようとしたら三塚由奈はあの性格だ、自分は布団じゃなくて良いとか言い出さないだろうか？

やうじやなくても気を遣わせるのは間違いない。

俺は少しの間考えると携帯を取り出し電話を掛ける。

プルルルルと音が鳴り少し待つと通話相手が電話に出るのが分か
る。

『もしもし？ 藤田だけど、ビラじた西城？』

俺が電話を掛けたのは藤田だった。

何故藤田なのかといつと、それはつい一日前に会話した内容を思
い出していたからだ。

「藤田！！ 何も聞かずに寝袋を貸してくれえええーーー！」

『……は？』

そつ、ファミレス前での会話で藤田が寝袋を買つたという話を聞いていたため、今日一日だけ貸して貰おうといつ苦肉の策だ。布団は明日改めて買いに行く。

しかしイキナリだからか、藤田も凄い訝しんでいるのが分かる。

『西城ああな』

「三塚さん！？」

女の声?

藤田が何か言おうとしたところで台所から三塚由奈の悲鳴が聞こえてきた。間の悪い事にそれは電話先の藤田にも聞こえたようだ。

三塚由奈は慌てた様子で俺のところに駆け寄つて来た。

「ち、ちちち西城さん、大変ですーー。」

「え、どうしたの？」

卷之三

凄い慌てて何かを伝えようとしているが、これは深く考えなくて
も何の事か直ぐに分かつた。

「ああ、『ギブリ』が出たの?」

ええー？

見ると「キブリが一匹壁を走っていた。」の進路だと俺と三塚由奈のいる和室に侵入してくるだろう。

別に俺の部屋がゴキブリの出るほど汚いという訳ではなく、夏場だと何処からか部屋に侵入してくるのも珍しく無い。恐らくアパートの別室がゴキブリ発生源になっているのだと思う。

俺もゴキブリは完全に平氣という訳ではないが、寧ろ三塚由奈の怖がり方の方に驚いている。ていうか包丁持ちながらで危ない。

俺はゴキブリから田を離さず静かに携帯を耳に当てる

「もしもし、藤田？」

「何だ？」

「寝袋貸してくれる?」

『……言いたい事はそれだけか?』

「うそ、どうしよう。」

取つ合はず携帯を耳に当てながら器用にゴキブリを廻らしながら藤田になんて説明しようか考えるのであった。

「都会はやつぱみつ怖いんだか……。」

「ゴキブリは都会とか関係なく無い?」

共同生活は危険が一杯（1）

ドタバタしつつも何とかゴキブリを退治した俺は寝袋を借りる為に藤田にアパートまで来て貰った。

しかし家に入った瞬間、三塚由奈を見た藤田は口に銜えていた煙草をポロッと落としそうになるし、見た目金髪ヤンキーな藤田を見た三塚由奈は恐怖で凍りついた。

取り合えず立ち話も何なので、硬直している一人に声を掛け、部屋に入りテーブルを囲む状況まで扱ぎ付けた。

「……」

はい、沈黙が痛いです。

まあ、なんでなんか大体の想像は付くけどね。こじはなビリ見ても俺が話を進めるべきだろつ。

「藤田、寝袋持つてきててくれた？」

「こやこやこやこや、言つべき事は他に在るだらうー。」

話を進めようと思つたら藤田に突つ込まれた。

あれ？取り合えず本題からと思つたが違かつたのかなと思いつつ、ちゃんと寝袋を貸してくれた藤田。やさしいね。

「この人は何処の誰だよー？ いつ、西城に、そんな関係の女性が出来たー？」

言いながら藤田は視線を三塚由奈に移す。

その瞬間三塚由奈は藤田に視線を合わせない様にササッと顔を逸らした。やはりヤンキー顔の藤田に目を合わせるのは怖いらしい。

藤田の顔は初見だと怖くて見られないの方が多い。よく見ると俺と丘村を含む三人の中で一番カッコ良いと思うけどね。

一度だけ、すれ違つた子供に指を指されて泣かれたのは俺と丘村

の中で藤田を弄る爆笑の鉄板ネタとなつてゐる。

「あー、そつちかー」

「IJの状況でそれ以外の何処に氣になると画づんだー?」

「寝袋を持つて来てくれてゐるか、とか?」

「それはもう良いつつーのー、良こよ、好きなだけ貸してやるよー。
! それより説明しろーー!」

「……藤田、なんか無駄に熱いと言つか、切羽詰まつてない?」

何だろ?、妙に普段の藤田のキャラからかけ離れ過ぎてゐる様な
……。三塚由奈も大声をあげてゐる藤田に驚いてゐるし。

「西城、俺達は丘村を含めて四年……いや三年と半年の付き合つただ。

」

「……? そうだな」

「いいか? 西城、お前はモテない。いいか? モテないんだ!」

「否定できないが、何故二回言つた?」

重要な事なのか? それは重要な事だから二回言つたのか?

しかし俺がモテないと言つのは事実なので反論できない。俺自身が恋愛に興味がなったからというのもあるが、学力も運動能力も顔もたいした特徴が無い俺は女性からモテようが無いのだ。積極的に女性にアピールする性格でも無いし。

「生活の中に女つ気が全くないお前が、就活が終わり、夏季休業が始まるとここの時期に家で女性と二人きり……、正直俺はへこんでいる」

「完全に僻みだよな」

まあ、藤田や丘村に彼女が出来たら俺も同じ反応するかもしねない。

現状、俺と三塚由奈はそんな関係では無いので濡れ衣と言つか、邪推されていふと言つか、とにかく勘違いされているのは分かつた。

「……で、何処で騙して誘拐したんだ？」

「三年と半年の付き合いで最終的な解釈がそれがあああああ！？」

その結論はあんまりだ。

ていうか、さつきから遠回しに俺が三塚由奈と一緒に居るのが意外という反応を通り越してこの世の終わりのような反応をされてい

る気がする。

「まあ冗談はこれくらいにして……」

藤田は煙草に火を付け、煙を吐きながらそう言つた。

どうやら途中から遊ばれていただけらしい。何処までが「冗談で何処までが本気かは分からぬいけど。

「結局、俺や丘村達の知らない所で上手くやつていたといつ解釈で良いのか?」

「うーん、改めてちゃんと説明しようになると難しいな

「何でだよ?」

何から説明しようか考えていると先程からずっと黙つて俺達の会話を聞きながら座っている三塚由奈に気が付いた。

「ああ、三塚さん、コイツは俺と同じ大学で友人の藤田ね

よくよく考えたらお互いを紹介していない事に気が付いた。三塚由奈も俺の意図に気が付いたのか藤田に向かって自分から名乗つた。

……まだ藤田の顔に田線を合わせられないみたいだけ。

「三塚由奈です。宜しくお願ひします」

「あ、俺は藤田 売つて言つんだけど……、まあ藤田で覚えてくれ

「んでも、田口紹介が済んだとこで藤田は許婚つてどつ細つ?

「……はあ?」

お互に名乗つたのが功を奏したのか、若干雰囲気が柔らかくなつた気がする。

そのままの勢いで此処最近の出来事を三塚由奈にも協力して貰つてなるべく詳しく藤田に説明した。

藤田は終始訝しがり表情を崩さなかつたけど三塚由奈も説明や補足を入れてくれたりすると少しずつ信用してくれるよつとなつた。

「そして今日が共同生活初日で、わざと布団が一組足りない事に気

付いて今に至る

「マヌケ」

「つむれー

最後まで聞いた藤田は短くなつた煙草を携帯灰皿に入れて新しい煙草を取り出した。

「……一応最後まで聞いたけど、よくそれで共同生活する事になつたよな。そこがビックリだ」

「まあ、半年は猶予が出来るし、親の意図が不明だからな」

「西城の親はともかく、三塚さんの親は？」

「……私の親も今聞くのは無理ですね」

「じゃあ現状維持しか無いな。少なくとも一ヶ月後には聞き出せらるんだろうし、それまでは適当に生活するしかない。両親同士で洒落にならない約束事もあるかもしれないし」

「洒落にならない約束事？」

三塚由奈が小首を傾げながら疑問の声をあげる。

藤田は少し考えた後

「金錢関連とか？」

「ええー？ 娘をあげるからお金頂戴つてやつ？ 立派な犯罪だろ、それ」

「それないです」

「まあ冗談だからな。実際俺達が考へても答へは出ねえ。今のはそんな約束が裏で会つたのかもってだけの推測の話だ」

「うーむ、あの親父がそんな黒い事出来る様な性格とは思えないけど」

その後も推測や憶測の域が出ない話が幾つか出たが、最終的に一ヶ月後に本人に聞くしかないと言つ事になつた。

一息ついたところで藤田が深い溜息を吐いた。

「俺は西城の惚氣話しを聞く心算だったんだがなあ……」

「悪かつたな、予想と違つてて」

「いや、寧ろ心の底から安心したわ」

「どうじつ意味だ！」

それはあれか、俺にそういう女性が現れることは絶対に無い」と言つているのか？

あり得ないと思つてしまつ自分が恨めしい。

また煙草が短くなつてきたところで藤田は腕時計で時間を確認した。俺と三塚由奈もつられて時間を確認する。

「 つともう八時か、ちょっと裏面じ過ぎたかな。 そろそろ帰るわ。」

「 そうだな、俺もお腹が空いたよ

「 ……事情を知つちまつたからな、何か困つた事があつたら言つてくれ。出来る範囲で手助けしてやるよ

「 おお、本当か！」

その後、三塚由奈は晩御飯の準備をして俺は藤田を見送るために玄関まで付いて行つた。

ドアノブに手を掛けたところで藤田は此方を振り返つた。

「 しかし、男と女が共同生活つて幾ら家族公認でも問題在りだな

「 そつなんだよなー。だから色々対策を 」

「お前の事だ、二人暮らしでも相手に無理やりつて状況は百パーセント無いだろうけど、お前が考えているより女との共同生活は大変だぞ？」

「信用されているのか貶されたのか微妙な気分だけど、心に刻んでおくよ」「ねえ

「まあ、頑張れ」

藤田は困ったような、同情しているようなどしづかずの表情を俺に向けたあと帰つて行つた。

藤田には実家に姉がいた筈なので俺と三塚由奈の共同生活がどうなるのか、在る程度予想が出来ているのかもしない。

和室の方へ戻ると三塚由奈が料理を丁度並び終えたところだった。

今日買つたばかりの食器に簡単で良いと言つたにも関わらずそこそこ手の込んだおかずが盛りつけられている。

「あ、西城さん。今並び終わりました」

「うん、ていうかいきなり友人を読んだりして御免。驚いたでしょ？」

「いえ、明日は我が身ですから」

「え？」

「藤田さんのあの様子だと、私の友達にも許婚の件は黙っていた方が良いのかなと」

「やうか、三塚さんにも友達がいたんだっけ

何より説明に時間が掛かる。

今回は俺の説明というより、三塚由奈がいたから藤田も信じたのだろうが、立場が変わった場合、三塚由奈の友人に俺が説明してどれだけ信じても貰えるのだろうか？

下手したら友達が変な男に騙されているとか判断されるかもしれない。

成り行きで始まつた共同生活だが、前途は多難だ。

共同生活は危険が一杯（2）

俺は藤田が帰る際に発した言葉を俺はもっと深く考えるべきだったと直ぐに後悔する事になった。

比較的に言葉も途切れず食事を終えた俺達は特に打ち合せをするでもなく、三塚由奈は皿洗い、俺は風呂掃除と役割分担した。

三塚由奈は家事手伝いをしていたから癖でやっているのだろうし、俺も一人暮らし……といつも昨日までの癖で動いているだけなので別にお互いを気遣つての行動という訳でもないと思う。

「……」

俺は浴槽を洗いながら今後の事を考える。

藤田にはバレてしまったがやはり許婚や共同生活の件は余り話さない方が良いだろう。しかし、どうしても話さなければならぬ人

物は現状、二人の候補が挙がる。

俺の部屋に遊びに来たりする丘村には遠からずバレるだろうし、恐らく連絡した事で三塚由奈の友達も三塚由奈がどこに住んでいるか等を気にするだろう。

この一には寧ろ面倒な事になる前に折を見て此方から話した方が後々変な勘違いもされないとと思う。藤田の様子を見ると、三塚由奈と説明すれば丘村は問題無いだろう。

問題は三塚由奈の友人だ。どんな人物か分からぬが、時間が在る時に三塚由奈に聞いた方が良いかもしない。その時は丘村の事も教えておこう。いきなりあつたらあの濃いキャラだ、藤田の時のように凍り付くかもしない。

それに三塚由奈に藤田の事を教えないで呼んだのは俺の反省点だ、あのヤンキー顔を説明なしに呼んだのは悪かったと思う。

しかし事情を知った藤田の協力が得られるのは大きいと思う。少なくとも丘村への説明はスムーズに進められるだろうし、今後俺と三塚由奈だけでは対応不可能な場面に直面した時、相談が出来る相手がいるだけで全然違う物だ。

考え事をしていると浴槽の掃除が終わった。

「後はお湯を沸かすだけか……」

後は機械のボタンを押せば自動でお湯を張ってくれる。

ボタンを押してお湯が沸くのを待つ為和室に行くと三塚由奈は持ってきた荷物を整理していた。

「持つてきた荷物はそれで全部？ 結構少ないね」

「基本は着替えがあれば何とかなりますよ」

三塚由奈が持つて来ていたのは着替えが主で、他には髪留め等の小物、小さい熊のぬいぐるみくらいだった。

「そうだけど……、うん、やっぱり服とかも買いに行こう」

「え？」

「だつて鞄に入る程度の着替えじゃ足りないでしょ？」

「洗濯すれば？」

「雨が降つたりして乾かなかつたら大変だよ？」

「うう……、でもお金は……」

「お祖母ちゃんから一人暮らしで臨時支給があつたから大丈

夫

「うー

三塚由奈は服を買うか買わないかで葛藤している様だが、やはり女性として新しい服に魅力が在るのだろう。やっぱり新しい服を買に行こう、もし男の俺と一緒に探しにくいと言つなら三塚由奈の友達に任せても良いかもしない。

暫くは三塚由奈の荷物整理の様子を見ていたりテレビに目を向けたりして過ごした。

荷物整理を手伝おうかとも思ったがチラッと覗かせた文物の下着が目に入った瞬間止めた。三塚由奈も時折顔を赤くしながらあたふたするので、俺は無理に手伝わずテレビに目を移すしかなかつた。

荷物整理が終わりテレビを見ていると風呂場からお湯が沸いたアラームが鳴つた。

「お風呂、沸いたみたいだから先に入りなよ

「あ、はい」

「タオルは洗濯機の横の棚に入っているから

うん、こうして見ると共同生活といつのも案外そんなに大変では無いかもしない。

許婚とはいって、あくまで俺と三塚由奈は他人同士なのでかなり気は使うが、ずっとこの調子なら別に半年間一緒に住むとなつても苦にならないかもしね。

「あがりましたよー」

「ああ、う」

途中から言葉が出なかつた。

振り向いた俺は湯上りの女性が放つ色香を三塚由奈に見てしまつたからだ。濡れた長い髪をタオルで拭きながら現れた三塚由奈は湯上りの為か顔を火照らせ妙な艶やかさがあり、薄緑色の半袖パジャマを着ていた。

俺は不意に浮かび上がつた変な考えを無理やり振り払つと風呂に

入るため風呂場へ向かった。そして着ていた服を脱いで洗濯機に入れようとしたところでハツと気付いた。

既に誰かの服が入っています、誰のかなんて考えるまでもあります
ん、はい。

「（）」

主に俺の精神面が。

俺の錆ついた何かを刺激する。恋愛歴ゼロの俺には女性の衣服だつて精神的にダメージを与えるのだ。ところが三塚由奈も無防備過ぎると想つ。

彼ら共同生活をすることでも一週間前までお互い知らない者同士への行動や態度ではない様な気がする。

お湯に浸かりながら俺は今後の共同生活に今さらながら不安を覚えるのだった。

「はーーー」

肩まで浸かると悶わず溜息がでた。

今思えば藤田はこの俺の状態を予測していたのだろう。実家で姉と暮らしていた藤田だ、女性の生活がある程度知つていて俺と三塚由奈の場合で置き換えてみたに違いない。

藤田の場合は家族なので特に気を使う事も無かつただろうが、俺と三塚由奈の場合は違う。

帰る前の困ったような、同情しているような顔をしていたのはこの事なのだろう。

俺にも妹がいるが、妹は中学生で女性と意識することも無いし、別々に住んでいる為そんな状況にもならない。もっと言つと家族なので何とも思わない。

やうと思つと藤田の言いたかった事が若干理解出来た。

女性との共同生活は、大変です。

「よし、寝よ。」

「そうですね

夜の十時、風呂から上がった俺は黒いジャージのズボンと白い半そでTシャツを見に包み勢い良く、といつか勢いだけでそう言った。風呂に入る前に三塚由奈が小さく欠伸しているのが見えたのと単純に俺も疲れた。

何か色々あつた気もするが今日が共同生活初日なのだ。移動等もあつて疲れたに違いない。

その為か三塚由奈も賛成したようだ。

「良いしょつと」

俺は和室のテーブルを台所の方へ持つていいく。脇に立て掛けておけば別に邪魔にならないがこうした方が広々と布団を敷けるだろう。

三塚由奈が布団を敷いたのを確認すると俺は藤田から借りた寝袋を手に取り洋室へのドアに手を掛ける。

「じゃ、お休み。その襖は洋室と繋がっているから何かあつたら開けて俺を呼んでね

「何か、ですか？」

「……うん、まあ何かだよ」

またゴキブリが出たら、なんて寝る前に言ひべきじゃないだろ？

言葉を濁しながら俺は洋室の方へ入った。

「お休みなさい」

「……お休み」

洋室に入った俺だが別に直ぐ寝る訳でもなくパソコンの電源を入れた。

俺の手元には大学の教授から渡された分厚い参考書とレポートがある、この分厚さでは英語を翻訳するだけで凄い時間が掛かる。そのうえ内容も理解しなければならないと言うのは夏季休業では時間が足りないかもしれないで早めに動く事にしたのだ。

「（うげえ、酷いなこれは）」

インターネット上では無料英語翻訳サイトといつものがある。

これは短文なら割と重宝するが長文となると和訳した日本語がおかしくなったり科学の専門用語や名詞は上手く変換されない事がある。そのため結局は一つ一つ手作業で和訳していかないといけないのだ。

そして今、幾つかの専門用語と思わしき単語で詰まつた。スペルで検索すると明らかに科学の専門家が入っているような有料情報サイトに跳んでしまい調べられない。

「（英語の授業、もつとちやんと受けたければ良かつたな）」「

改めて分厚い参考書に田を通す。相変わらず英語の羅列で何が書いてあるか分からぬ。

数式は分かるが何を求める式なのか分からぬ。

グラフは分かるが何の数値をグラフにしたのか分からぬ。

先は長かった。

「……つー。

不意に田元が痛んだ。長時間パソコンに向かつていると偶に起る。

田をパソコンから離して時計を見るともう深夜の三時を回りそう

だつた。

因みにレポートを作成している時は一睡もしない事もあるため別に遅くまで起きているとこう事自体に問題は無いが、今日は色々あつた為疲れが溜まつていてる。

パソコンに向かう集中力にも影響するし、今日中に終わらせなければいけない物でも無いので今日はこれくらいにして寝袋を敷き横になる。

隣の和室に面する三塚由奈はもう完全に寝てているだろう。

「（明日は……に布団を買ひ……行つて……、大学で藤……と教授……）

横になつて明日やる事を考えてこむとやはり疲れていたのか直ぐに寝てしまつた。

朝七時、睡眠時間四時間と少なめだが目が覚めた。

ああ、寝袋で寝ただつけどほんやり考えて一度寝しようかしないか考えようとした際、顔を横に向けると眠気が吹っ飛んだ。

「！？！？！？！？！？！？！？」

田の前にすやすやと熙る二塚由奈がいた。

共同生活は危険が一杯（3）

今、どうこう訳か田の前に三塚由奈が寝ている。

朝とはいえ季節は夏、若干蒸し暑い所為かお互い汗をかいっている。
それがまた何とも言えない女性特有の色気を

つてそういうだろーー！

とにかく落ち着いて状況を整理しよう。

一つ、何故か和室で寝ていた筈の三塚由奈が俺の寝ていた洋室に
来ている。

二つ、俺が寝たのは深夜三時頃。

三つ、和室と洋室を仕切る襖が開いている。

……状況を整理して考えても答えは出なかつた。

……………されよこれは拙い。唯でさえ寝不足の中、朝っぱらから俺

の精神を抉るこの状況を何とかしないといけない。

「… うか起きた瞬間に田の前に女性がいましたなんて俺が生きてきた人生の中で一度も無かつたので心臓に悪い。」

しかし気持ち良さそうに寝ている三塚由奈を起こすのは悪い気がしたので、俺は静かに起き上がり洋室から出た。

「……朝食作るか」

「だが俺は『』飯とみそ汁と目玉焼きの様な簡単な物しか作らない。料理はするが余り手の込んだ物は作れないし、朝はこれくらい軽い物で十分だからだ。」

顔を洗つついでに洗濯機も回し、新聞を取つたりといつもの朝の田課を手早く終わらせる。

そんな事をしている内に三塚由奈が田を覚ました。

田が在った瞬間に慌てた様子で話しかけてきた。

「す、すいません…！ 私、ひょっとして寝坊しました！？」

「いや、まだ七時半くらいだから寝坊つて程じゃないけど…、ていうか気になる事はそこなの？」

共同生活をする関係で三塚由奈が家事は自分の仕事だと感じて言ったのなら俺は気にしていない。

そもそも俺は三塚由奈に家事を強要している訳でもないし、そこは分担制で良いと思いつ。

そんな事より洋室で寝ていた事に関して何も無いのが気になる。

「和室で寝ていたのにどうして洋室に？ 朝起きた時凄く驚いたんだけど」「

「……朝早くに田が覚めたので、朝食とかどうじよつかと西城さんを起こしに行つたのですが、洋室が涼しくて、気持ち良さそうに寝ている西城さんを見ていたら眠くなっちゃつて」

洋室の方が涼しいのは多分俺が冷房を切らずに寝てしまつたからだ。

三塚由奈が朝早くに起きたという話は特におかしいとは思わない。俺のお祖母ちゃんが住んでいる地域、まあ直球で言えば田舎だが、そこ住んでいる人の殆どは早起きだから三塚由奈がそうだったとしても別に驚かない。

生活習慣といつものば中々抜けない物だから、普段のよひに今日も早くに起きたのだ。

それは良い、問題は

「俺の横で寝た意味は？　一応俺も男なのですが」

「西城さんは安全だと弟さんと御婆さんが言ってましたし　」

何故に此処で哲史とお祖母ちゃんが出てくる？

多分三塚由奈と初めて会った口に一緒に食べた夕食、あの時俺がいない間に三塚由奈とお祖母ちゃんが色々吹き込んだのだろう。哲史から吹き込まれたとしたらタイミング的にあの時しか無い。やはりあの時に哲史を帰らせるべきでは無かつた。

俺がそんなふざけた事を抜かす哲史へどう復讐するかを考えていると三塚由奈は言葉を続けた。

「あとは、西城さんは兄と同じ雰囲気を出していますから、親しみ易いのかもしれません」

「んん？　お兄さんがいたんだ？」

「……はー」

よく考えたら俺は三塚由奈の家族構成も知らなかつたな。

兄に雰囲気が似ているねえ……。少し腑に落ちないところがあるが、三塚由奈が俺に対して無防備な理由の一端が見えた気がした。

しかし三塚由奈の兄に対する話題で何か忘れているような、気付かないような、喉に魚の小骨が刺さっているような些細な違和感があつたのだが、気のせいだと思い気にしなかった。

「とにかく朝食を作ったから食べひやおひよ

「はい」

そう言つて俺と三塚由奈は食事の席に着く。

折角なので家事の役割分担等を話し合つた。俺が思つていて通り三塚由奈は家事は全部自分がやるつもりだつたようだ。意外そうな顔をされたが特別な事が無い限りは分担通りに家事を行つ事に決めた。

洗濯なども対応に結構困るが、お互いの下着以外は特に気にせず纏めて洗つことになった。

「共同生活で決めなきゃいけない事つて結構あつたね

「家事は全部私がやつても大丈夫ですよ?」

「それじゃ悪いし、三塚由奈さんも何かやりたい事をやれば良いよ

「やりたい事?」

「 もうちょっとで夏季休業だけど、俺は課題の関係で大学に行かなきゃいけないし、その日は三塚さんも暇でしょ？ 何かない？」

「これは共同生活が始まる前から考えていた事だ。」

今は夏季休業も近いし、夏季休業中は俺も三塚由奈の相手を出来るが、大学がある日などは一人になってしまつ。出来ればやりたい事を見つけて有意義に過ごして貰いたい。

三塚由奈は暫く視線を彷徨わせ、考えたのか思いついた事を口にした。

「バイトがしてみたいです」

「バイト？」

「私が住んでいたところは……その、閉鎖的といか余りそういう場がなかつたので」

「……そうだね。働けそつなところを探しておくよ、俺のバイト先に聞いてみても良いし」

「え、西城さんもバイトしていたんですか？」

「就活中で休んでいたけど」

取り合えず三塚由奈がやりたい事は分かつた。

確かに三塚由奈が住んでいた地域は働くとしたら密集化したスーパーくらいだ。そのスーパーだって通うのに凄い時間が掛かるだろう。

少し変わったバイトを探してあげた方が良いかもしない。

朝食を食つた後はまた課題に取り組んだ

頃合いを見て駅前に行き布団を購入し、バイトの求人雑誌を二冊手に入れた俺はその後、大学の方へ出向いていた。

布団を家に持つて帰った際に求人雑誌を一冊三塚由奈に渡しておいた。俺も良いのが無いか探すが、やはり自分が興味を持った仕事が一番だろう。

俺が大学に行く事で三塚由奈は一人になつてしまつが、今日は家の周りを散策して過ごすらしい。迷つた時は下手に動かず大学を目

印にしてラウンジで待機してくれれば迎えに行くと言つておいたの
で多分大丈夫だろう。

そんな事があつて俺は今、大学の研究室に居る。理由は一つで、
教授に話からなつた科学の専門用語を聞くことと藤田に寝袋を返す
ことだつた。

「くつせ、専門用語も載つてゐる辞書が在るのなら始めから貸して
くれば良いものを」

「教授は西城を試したみたいだぜ」

「……藤田、どうこいつ事だ？」

「ほり、分からぬ英単語をいつ聞きに来るかだよ。聞きに来る日
が早ければ早い程ちゃんと課題に取り組んでいることだら？」

「なんと…？ 意地が悪いと言つか策士といつか……」

「課題を出して一週間も経つて無いだろ？ 先生も機嫌良かつたぜ、
良かつたな」

藤田は毎日研究室に来ている関係上、俺や他の研究室に所属して
いる四年より教授と接する時間が多。その為今の様に教授の意図
に気付けるのだろう。

「どうか最近研究室に藤田と丘村がいるところしか見た事無い。
他の連中は何やつてゐるのだろうか。

「で、なんでお前はバイトの求人雑誌を広げているんだ？」

「……ああ」

この場には珍しく丘村がいなく、俺と藤田しかいない。俺は今朝の出来事を藤田に話した。

「……バイトねえ、何か良いのはあつたのか？」

「いや、パチンコ屋と居酒屋ばっかりだな」

現在は就職難でフリーターの道を選ぶ者も少なくない。バイトから正社員に成れる確率は約四割くらいらしいが、それでも就職活動が上手いかない人達はフリーターを選択する人が多いのか、目ぼしい仕事は見つからなかつた。

「ま、俺も何か探しておくれ」

「すまんね」

ふと、丘村に三塚由奈の事をどう説明しようかと相談しようかと思つた。

藤田の件が在るので俺と三塚由奈が一人で説明すれば変な誤解無く信じてくれるかもしれないが、藤田の協力があればもっとスムーズに行くだろうからだ。

「藤田、丘村にも近いうちに昨日の件を説明したいんだけど協力してくれない?」

「それは良いんだけどよ……」

了承しつつも丘村の名前を出した瞬間、藤田は難しい顔をした。

俺はそれが気になつたのでバイトの求人雑誌を閉じて藤田の方へ向きあつた。

「……? 何か問題があるのか?」

「……あると言えばあるな」

尚も言い淀む藤田だがやがて觀念したのか、難しい顔をしている理由を口にした。

「丘村が行方不明になつてゐる。判明したのは昨日、お前と別れた後だけどな」

「えつ……?」

「丘村が行方不明？ 何でだ？」

俺が疑問に思つてゐると藤田は詳しい事情を話してくれた。

「丘村の奴、まだ内定貰つていなかつただろ？ お前と昼食つた後にな、研究室のパソコンで会社選考の結果を確認したら……」

「……落ちてたのか？」

「一度に五社の結果が来てな。全部駄目だった」

「そう言わると俺も心配になつて來た。」

就職難の中、いろんな人がいる。

すんなりと内定を決める者、希望とは違ひつつも妥協する者、諦めない者、そして……諦める者、絶望する者。

特に後ろの一、二つは厄介だ。立ち直れば良いが、そうでなければこの時世、悪い考えが俺と藤田の頭に過る。

「流石に丘村もショックだつたんだろうな」

「……」

「事情を知っているのは俺を含めて三人だ」

「俺を入れて四人か……、少ないな」

「まだ何かあつたと決めつけるには早いし……、取り合えず詳しい話しをしたいから場所を移そうぜ。流石に此処で一人きりで話すのは気が滅入りそうなんでな」

そう言つと藤田は研究室の外に出ることを促す。

俺は静かに頷いた。

混迷のお祭り（一）

研究室から出た俺は丘村について詳しい話を聞く為に場所を食堂に移した。

話しの内容が内容だけに食堂で話して良いのかと疑問に思つたが、毎時から少し経つてゐるのと、美味しいないと評判が在る所がか席はがらがらに空いていた。

これくらいの人の量だと別に誰かに聞かれる事も無いだろう。寧ろ藤田の顔にビビつて誰も近付いて来ない。

「さて、まずは何から話すべきだ？」

「一応聞くけど、行方不明つて病氣や怪我でつて訳じやないんだよな？」

食堂の空いている席に座つた俺達は早速話を始めた。

実は大学生の行方不明や音信普通といふのは割と良く聞く話で、

大体が病気や怪我が原因で入院する等で携帯も繋がらない状況なだけだつたりする。

大学側には休みの理由が伝わっている場合があるが、小中高のようないームルームが無い大学では他の学生に休みの理由が伝えられる事も無い。そこから発生する誤解も珍しくは無いのだ。

まずはその事についての確認を込めての質問した。

「それは県外から来て一人暮らしをしている奴に多い事だろ？ 丘村は県内出身で自宅通いだから当てはまらねえよ。……て言つたか、俺に丘村の親から電話があつたから少なくとも自宅に居ないのは本当だと思つ」

「えつ……？ 丘村の親から電話があつたのか？ 何で？」

「……それについてはやつぱりファミレスで昼を食つた日の事を話さねえとな」

藤田は静かにあの日あつた事を語りだした。

「さつさも言つたけどよ、あの日、丘村は研究室のパソコンで会社選考の結果を確認していたんだよ」

会社選考の結果、内定を貰つた俺でもその言葉を聞くと胃が痛くなる。

そもそも会社の選考結果がメールで返ってくるのは殆どの確率で落ちている。大抵は受かっていれば書面で結果が送られてくるが、もちろん合格の結果がメールで届く会社も在り、不合格通知も書面で届く場合も在り、それは会社ごとに違うので一概には言えない。

「そうしたら五社からの結果が返ってきていてな、丘村も開く勇気が無かつたんだろうな。その場に居た俺と青木と森野さんも巻き込んで全員でメール開く手伝いをしてやつたんだよ」

青木と森野というのは俺達と同じ研究室の四年だ。青木は丘村と同じ高校出身とかで丘村と一番親しかった。そして森野というのは理系大学ではかなり珍しく、女性だ。そして俺達の研究室で唯一の女性でも在る。

「青木は兎も角、森野まで手伝ったのか？」

「……丘村が騒ぐから煩かつたんだろうな」

丘村がメールの確認で騒ぐのも就活を終えたばかりの俺には領けた話しだ。正直、会社選考の結果確認は怖い。

この時期まで決まらなかつたのだ、今までに何回同じ結果の文面を見て来たか分かつたものじゃない。俺でも就活中に一通同時に結果が来た時が在り、その時は両方とも落ちているのを見てかなり気持ちが沈んだ。

その事を考へると五通同時に来た丘村の不安も察する事が出来た。きっと一通一通の確認は気持ちが擦り切れるような思いだったに違いない。

「まあ、俺も青木も森野さんも五通もあればどれか一つくらいは受かってるだろ?と思つていたんだけどな……」

「……無かったんだよな?」

「ああ、それで流石に丘村になんて言つて良いか分からなくなつて、つぶ言つちましたんだよ」

『運が悪かっただけさ、次を頑張りうぜ』

『しゃあつとしなよ、気持ちを入れ替えないとまた落ちるよ。』

『ほんと事もあるつて! あんまり気にすんなー。』

それは眞の気遣いだった。普段、丘村と話しをしない女性の森野まで声を掛けると言つて事はその時の丘村は相当酷い状態だったのだ。

しかし三人の言葉は丘村に届かなかった。

『ふざけるな……』

『！？』

『！』

『お、丘村氏？』

三人は驚いたのだろう。丘村が怒鳴る事なんて今まで無かつた藤田も俺も、恐らく高校が同じだった青木も見た事が無い。俺も話を聞いただけではあの丘村が怒鳴ったなんて俄かには信じられない。

しかし、丘村の気持ちが少し理解出来る俺には三人のタイミングと何処の言葉が悪かつたか理解していた。

“とっくに頑張っている”、“気持なんて簡単に切り替えられるか”、“こんな事があつたら氣にするに決まっているだろ”……
丘村が言つた事はそんなところか？

「……凄いな西城、殆ど丘村が言つた言葉そのものだ」

「就職活動をやつていれば誰だつて一度は思つ感情だと思つからね

就職活動が上手く言つていらない人は軽い鬱病に掛かっていると言
われている。そんな中で中途半端な励ましは本人を追い詰める結果
にしかならない。

無論励まそうとした三人にも全く非はない。丘村がそんな反応を
するなんて予想出来なかつただろう。

藤田は俺の言葉を聞いた後、自嘲氣に呟いた。

「……俺はそんな事も分からなかつた。だから丘村にも言われたよ

「……何をだ？」

『親族の口内定の藤田には俺の気持ちが分かるかー！』

流石にその丘村の言葉には俺も目を見開き息を呑んだ。

「 つーー？」

「いや、分かっているんだ。俺の家も色々事情が在るんだけどよ、他の誰よりも早く就活を終わらせたのは事実だろ？ 内定の報告をした時、何人か面白くなさそうな顔をしていたのには気が付いていた」

「藤田、丘村が言つた事は……」

「たぶん本心じゃない、って信じたいけどな」

気持ちが沈んでいる時に思つても無い事を言つてしまつ事は普段から良くあることだ。

それに、藤田は俺や丘村、他の研究室の四年の就活のサポートも積極に行つてくれた。それを知つてゐる丘村が本気でそんな事を言つたとは思えなかつた。

「俺も様子が気になつたからさ、その日の夜に丘村に電話したんだよ、……出なかつたけどな。俺も少し気持ちの整理をする時間が在つた方が良いと思ってそれ以上電話しなかつたんだ」

「そうしたら昨日、俺と別れた後に丘村の親から電話が在つた？」

「そうだ。西城の部屋から出て直ぐだな。丘村の携帯から電話が来て、出たら母親だった」

此処まで聞くと大体の状況が理解出来た。

しかし一つだけ分からぬ事がある。

「なんでお前に電話が来るんだ？」

「携帯が置いてあつて、丘村の携帯に最後の電話をしたのが俺だつたみたいでリダイヤルで掛けて来たらしい。話を聞くと家でもちよつと揉めたらしくてな。家を飛び出したつて」

「携帯を家に置いて行つたのか……。じゃあ俺にもそのうち電話が掛かってくるのかな？」

自分の子供の行方が分からなくなつたらその知人全員に連絡をして確認をするだろう。でも俺の携帯にはそんな着信はない。

「いや、俺が西城悠斗の家にはいませんでしたって言つといた。お前は三塚さんの問題で手が一杯の様だしな。本来なら西城には知らせず、俺と青木と森野さんの三人で片付ける心算だった」

「……確かに俺は今色々大変だけど、友人が困つている時に何も知らないで過ごす方が嫌だ！」

「……そうだな、お前はそういう奴だつた。でも、なるべくお前は三塚さんの事だけを考えている。丘村の事は見かけたら俺に連絡する程度で良い」

それでも藤田は強情に手伝う事を拒んだ。何を考えているのか分からぬが、そこまで強く言ひのなら藤田にも何か考えが在るのだろう。

丘村を個人的に探すべしらいなら俺一人でも出来る。見かけたらまでは自分で声を掛けて様子を見ようと思つた。

「……分かつた。何かあつたら俺にも連絡してくれ。今日はもう帰るよ」

「そつだな、俺も研究室に帰るわ」

「……つて藤田は丘村を探しに行かないのかよ！？」

「西城、丘村が言つた言葉を忘れたのか？ 俺が見つけても丘村が嫌がるのは目に見えているからな、それは青木と森野さんに任せて俺は連絡係」

「なるほど」

俺は藤田と別れた後、念のためラウンジに顔を出した。三塚由奈が迷つたら此処に来るよつに言つておいたのでもし居たら連れて行こうと思つたからだ。

しかし三塚由奈は居なかつた、多分迷わずに散策出来たのだろう。

「あれ～、西城先輩じゃないですか～？」

「ホントだ！」

「今日はどうしたんですか～？」

「つおつ～？ 何故取り囲む～？」

学生ラウンジをキョロキョロ見ていたらサークルの後輩に見つかり囲まれた。

俺は天文部に所属し部長もしていた。就職活動が忙しく最近は全く顔を出していなかつたため、後輩達は俺が現れた事に驚いたらしい。

理系で女性は珍しいのに我が天文部は女性部員を何人か獲得している。今俺を取り囲んでいる三人も女子だ。

確か三年の小井川さんと一年の飯澤さんと花崎さんだった筈、全く顔を出さなかつたのでもう名前がつぶつ覚えた。

「と、取り合えず今急いでいるからどうしてくれない？」

「え～？ ジヤ、今度サークルに顔を出してくだいよ～？」

「そーだそーだ、サボんなー」

「いやいや、俺は今まで就活で忙しかつた訳でしてね？」

「終わったじゃないですか」

「……ソウダネ」

ある程度やり取りをすると彼女達も用事が在るのか直ぐに去つて行つた

俺はしつかりと次のサークル活動に来る事を約束され、グッタリしていた。本来四年は自由参加なのだが、女子のあのパワーに負けて就活中も度々呼び出されていた。

俺は溜息を吐くと帰る為に足を進めた。

家に帰ると三塚由奈が西た。どうやら本当に道に迷わず済んだらしい。

「あ、西城さん、お帰りなさいー。」

「……ただいま」

自分の家なのに自分の家じゃなによつた妙な感覚を感じながらもお帰りと言つて貰えるのって良いなと素直に思うのだった。

混迷のお祭り（2）

あの藤田とのやり取りから数日が経った。

依然として丘村は見つかっていない。丘村の親も事情が事情なだけに警察に連絡したりはしていないみたいだがこの調子だと時間の問題だと思つ。

俺も人通りが多い所等ではよく周りを注意して丘村が居ないかを探していたが、余り効果は無かつた。

「西城さん、どうかしました？ 最近ずっと元気無いんですけど……。疲れているのなら買い物くらい私一人で行つてきますよ？」

「御免。ちょっとと考え事をね。大丈夫だからサッサと買い物を済ませちゃおう」

丘村の事は三塚由奈に話していない。

余計な心配を掛けたくないと言うのもあるが、見ず知らずの人間が行方不明になつたと言つても三塚由奈が反応に困るだけだし、この手の話題はそう沢山の人に話すべきじゃないと思つ。

そして数日という時間は俺と三塚由奈の共同生活もそれなりに慣れるには十分な時間だった。

俺の精神面へのダメージはまだまだ慣れないが、当番制にした家事はスムーズにこなせるようになったし、朝の三塚由奈は本当に寝相が悪いと言う事も分かった。同時に三塚由奈に俺が毎日夜遅くまで課題をやっている事にも気付かれた。

丘村の事は気になるが、どういうわけか課題は数日前までが嘘のように集中して取り組めた。お陰で今も少し寝不足だ。

三塚由奈はそれを気遣ってくれている様だが丘村が何処に居るか分からぬ関係上、外出する機会は多い方が良い。それにまだ三塚由奈もこの辺に慣れていないので此処最近は買い物に一人で行くようになっていた。

家から直ぐなので十分と掛からずスーパーへ着いた。途中、俺と同じ大学に通う学生らしき人物と何度かすれ違つが丘村の姿は無かつた。

「今日は何買いつの?」

「……西城さんは何か食べたい物つてあります?」

「三塚さんが作るものなら何でも食べるよ

「じゃあ最近暑いですし、冷や奴と……」

手の込んだ物を作れない俺とは違い、家事手伝いをしていた三塚由奈の料理は一人暮らしでインスタント食品と男料理に慣れた俺に

食事の楽しみを思い出させてくれた偉大な物だった。

今日は三塚由奈が作る口なので俺も内心では期待していた。

まあ、御陰で俺も下手な物を作れないと料理当番の時は戦々恐々なのだが。

「じゃあ、西城さんは豆腐を見てきますか？ 私はお肉見てくるので」

「分かった、終わったらそっちに行けば良い？」

「はい、お願ひします」

そう言つと三塚由奈は精肉コーナーへ足を向けた。俺も豆腐を行こうと顔を向けると、ジーッとこっちを見る人物がいる事に気が付いた。

「……」

「……森野？」

俺、藤田、丘村と同じ研究室に所属する唯一女性で四年、森野だつた。

不思議な事に若干顔を青ざめ、目を見開き口も半開きで「この世の物とは思えない物を見た、そんな表情をしていた。

藤田と丘村とは違ひ俺だけは森野とサークル関係で研究室が同じになる前から交流が在ったのと、コイツの本性を知っている為、俺は森野に容赦がない

「なんだ、その俺を崇める様な眼は？」

「何でそつなるのよ！－ 単純に驚いていたのよ、アンタ今誰と一緒に居たのよ？」

「お前には関係ない。それより丘村の件はお前も関わっているんだろ？ どうなつているんだよ」

三塚由奈と一緒に居る事を見られていたのは予想の範囲内だ。實際このスーパーには大学の知り合いも利用するし、實際此処数日で顔見知り程度の奴となられ違つてもいる。

しかし藤田や丘村のよつうな学外でも付き合いのある奴にばれなければそれ程影響はない。俺とある程度交流の在る者なら目の前の森野と同じ反応をするかもしぬないが、總じて俺の大学の連中は誰が誰と一緒に居よつが基本気にしない方だ。

それより森野は丘村の件の当事者の一人だ。話題逸らしと同時に今どんな状況か気になるので聞いてみた。

「ふん、上手く話題を逸らした心算？ 残念だけど、私はそれに関わっていなーいわ」

「は？ なんで？」

藤田は青木と森野の三人で丘村の件を片付けるつもりだと黙つていた。

食い違つ意見に俺は混乱するが森野は尚も続ける。

「そもそも何で私が丘村を探すのに協力しないといけないのかしら？ 私も流石に一度に五社も不合格なのは可哀想だと思つたから励ましてあげたのに、丘村が勝手に逆切れしたのよ？」

「……それはそうだが、森野だつて就活を経験しているんだから丘村の気持ちもわかるだろ？」

「そうよ、だから励まそつと思つたわ。けどその後のアイツの行動に付き合つ義理は無いの」

「……」

俺は何も言い返せなかつた。

本来余り親しく無い森野に丘村を探す事を強制する権利は俺に無いし、森野の言つた事にも一理あると思つてしまつたからだ。森野は女王様気質というか自己中心的な所が在るのだが、言つてはいる事

は的を射ている。

だから性質が悪いとも思ひ。

「思つた事を行動に出来るのは羨ましいけど、丘村の事情だつて理解しているわけだし、少しふうには協力しても良いんじやないか?」

「……やつね、丘村を見かけたら西城に連絡するわ。これで良いかしら?」

「何故に俺? 藤田や青木は?」

「私が連絡先を知つてるのはアンタだけよ」

「そこですか」

まあ、見かけたら連絡すると言つてくれているのだし、全く手伝つてくれないよりは助かるだろ? しかしまともに探しているのがこれで実質青木一人というのは凄い心許ない。

森野は丘村の話しあはこれで終わつとばかりに話題を戻してきた。

「で、やつを女性は誰なわけ?」

「じつこいな、誰でも良いだろ?」

「良くないから聞いてこるのはだけだ」

「はあ？ 何で？」

「……まあ良いわ、次に会つた時にちゃんと聞くから。私もサッサと買い物を済ませないといけないしね」

「その買い物籠、インスタントばかりだな」

「「うるせー」」

森野も確かこの付近で一人暮らしをしている筈だ。女性専用のアパートとかで天文部の女性部員連中も何人かそこに住んでいたと記憶している。

「どうか森野も俺と同じ天文部だつたりする。

三年の小井川さんも一年の飯澤さんと花崎さんも、同じアパート繋がりで森野が誘つて入部させたのだ。天文部が他の部活やサークルと違い女性部員の獲得に成功しているのはそんな背景が在る。

俺も豆腐を持って三塚由奈の所に行こうとするが、森野はレジに向かおうとした足を止め、此方を向かずに言葉を発した。

「西城、丘村がブログをやっていた事は知つている？」

「ああ、オタク向けの情報サイトを作つたってかなり前に研究室で言つてたっけ」

「……そのサイト、一昨日更新されていたのよ

「……」

「少なくともネット環境が在る場所に居て、上村自身が無事なのは確かね」

「……そつか、教えてくれてありがとな

「ふん、私が知ってるのはそんぐらい

やう言つたと森野はレジの方へ歩いて行つた。口ではああ言つていたけど、森野も色々やつてくれたのだろう。俺は心の中で森野に感謝しつつその情報を藤田と青木に送つた。

そして少し遅くなつたが豆腐を持って三塚由奈のいる精肉コーナーへ向かつた。

精肉コーナーへ行くと特徴的な長髪の女性が直ぐに見つかった。
しかし何やらぼんやりと眺めている。

「……」

「三塚さん？」

「あ、西城さん」

「花火大会のチラシを見ていたの？」

そう、三塚由奈が見ていたのは花火大会のチラシだった。ここ等辺では毎年行われている行事で、花火は駅前でも見れる為この時期に連動して駅前でも沢山のイベントが行われる。

そのため人通りが非常に多くなる日もある。

俺は過去に家族と行つた事が在り、その人の多さで気分が悪くなつたのでそれ以来行つていなかつた。

しかし三塚由奈は一度も行つた事が無いので興味が在るのだろう。三塚由奈が住んでいる場所から気軽に見に来れる程近く無い。県内で行われる花火大会でも割と規模の大きい物だし、俺も来年東京へ行くので最後に見ておくのも良いかもしけない。

「行こうか？ 花火大会」

「え、良いんですか？」

「ついでだから花火大会当日の昼頃に駅前へ行つて前に言つていた服を買いに行こうよ。携帯とかも買つた方が良いかもしねないし。後は時間までぶらぶらして七時開始の花火を見て帰つて来るつてのはどう？」

「それは良いんですけどやっぱり服は……、うーん」

また服で葛藤している。

女性の服って何処で売っているのか分からぬけど、やっぱり調べて行つた方が良いのだろうか。取り合えず俺は当田さめにお金を持つて行つた方が良いかなと考へるのだった。

それに三塚由奈には言えないが、当田丘村を見かける事もあるかもしれない。

いなかつたらいなかつたで三塚由奈を案内しながら花火大会や駅前のお祭りを楽しめばいい。

「ところで花火大会つていつだっけ？」

「明日です」

「明日ー?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2832n/>

俺と許嫁

2010年10月20日08時07分発行